

特203

247

國民經濟乃進歩

財團 國民工業學院教務委員
慶應義塾大學教授
法學博士 氣賀勘重先生著

(經濟原論)

特別冊子
本科第二輯

財團 國民工業學院發行



0020122000

0020122-000

特203-247

國民經濟の進歩

氣賀勘重・著

國民工業學院

昭和7

ADB

特203
247



本書「國民經濟の進歩」は、本學院教務委員法學博士氣賀勘重先生が、經濟學の原理を説き、併せてその應用を示されたもので、稱して「經濟原論」といふべきものである。先生は多年慶應義塾大學の經濟學教授として、専ら學生の指導に當られ、屢々歐米諸國の實際を視察して、その經濟意見を發表されたので、斯道に造詣の深いことは、夙に世人の認めてゐるところである。本學院は先生に教務委員を依頼し、特に請うて生徒諸子の爲に本書の著述を頼し、これを本科特別冊子第二輯として印刷に附することとした。なほ先生は本學院生徒諸子にその趣旨を貫徹させる爲に、「物價と所得」を著述して、本書の續篇とせられることを承諾されて居る。



本學院は道徳の信念開發と、その實行勸奨とを主とし、加ふるに作業要義・工場經濟を知得せしめることを期し特に特別冊子を印刷して、生徒諸子に配布して居ることは、諸子の豫ねて承知する所である。而して道徳・作業に關するものは、既に屢々特別冊子として配布せしが、その經濟に關するものは本書を以て初めとするのである。これに次ぐに「物價と所得」とを以てし、尙これと前後して「産業合理化の眞髓」を編纂し、これまた特別冊子として配布する積りである。

この「産業合理化の真髓」は、産業の統制・能率の増進に就いて詳細に説明を試み、本書並に「物價と所得」と相俟ちて、諸子をして工場經濟の果して何であるかを知得せしめんとするのである。吾々が諸子に期待する所のものを諒として、教科書學習の餘暇、これ等の特別冊子を熟讀する所あらば幸である。

昭和七年七月一日

財團法人國民工業學院理事長 井上角五郎

序

本著は初學者の爲に、經濟學の大綱を説明する目的で、先づその第一着歩として、經濟なるもの、本態を明かにし、更に經濟發達の基本であり根柢である生産が、如何なる原因に支配されて、如何に増減するかを述べると共に、その生産を増進させる爲に、如何なる施設や制度が、必要であるかを示さうと試みたものである。近來、學問研究の進むと共に、經濟に關する我が國朝野の議論も施設も、漸く細に入り徹に進むに至つた結果、動もすると、その議論・施設は枝葉末節に馳せて、根本の大綱を閑却し又は忘却する様になつた觀あるものが少くない。殊に階級の對立や闘争に關する歐洲の思想が、社會一般に浸潤して來てからは、利益の按配や所得の分配に對する階級的の觀念が人心を支配して、按配し分配すべき利益や所得の、根本である財の生産そのもの、消長に對する關心を、全く忘失したかと思はれる場合が少からず見受けられる。けれども、利益を分けるには、先づその分ける利益の存在が無ければならず、所得を分配するには、先づその分配すべき所得の存在することが必要である。吾々は利益を争ひ所得分配を争ふ前に、先づその利益その所得の本源である生産の増大を圖

らなくてはならぬ。この生産の増進・一般所得の本根の増大に就ては、階級の對立も抗争もあるべき筈はない。社會の各員・各階級共に協力大にこれに勉むべきである。さうして、この關係を明かにしようとするのが本著の要點である。かうして生産され増加された財が、如何にして社會の各員・各階級に分配され、如何にして各人の物質的幸福に資するかを明かにする爲には、更に物價の高低やその變動の由來を究め、賃銀・利潤・利子など各種の所得が決定せられる次第を明かにし、また各人の所得消費の方針をも攻究せねばならぬのであるから、これ等の問題に就ては、別に「物價と所得」と題する本書續篇一冊を稿して、これを説明する豫定である。

昭和七年七月一日

氣 賀 勘 重

國民經濟の進歩（經濟原論）目次

第一講 經濟とその本則	一頁
一 經濟といふ概念	一
二 欲望とその種類	二
三 欲望の増加と進化	六
四 欲望の満足とその手段	八
五 財とその種類	一〇
六 價値とその大小	二二
七 價値の産出と經濟の本態	二四
第二講 社會の經濟	一七
一 個人の經濟と團體の經濟	一七
二 所屬關係と交易關係	二〇
三 交易關係の發達	二三
四 代價の發現と經濟活動の目標	二八
五 公私經濟の利害の衝突とその調和	三二

六 生産の増加と分配・消費……………三三

第三講 生産の要素……………三五

一 生産の三要素とその消長……………三五

二 労働の生産作用とその能率……………三六

三 土地の生産作用とその特質……………四三

四 資本の生産作用とその増加……………四七

第四講 生産の組織と制度……………五三

一 分業と協力……………五三

二 企業制の出現とその必要……………五七

三 経営の大小とその發達の趨勢……………六一

四 強制々度の弊害と自由制度の發生……………六三

五 經濟政策の實施と社會主義の空論……………六八

第五講 生産の消長と個人の幸福……………七一

一 生産の増加と分配の適否……………七一

二 分配の改革意見とその長短……………七三

三 物價の高低と所得の増減……………七九

國民經濟の進歩

(經濟原論)

氣 賀 勘 重 著

第一講 經濟その本則

一 經濟といふ概念

經濟とは生計の意義

經濟といふ言葉は、一寸難しい言葉のやうであるが、平易にいへば、生計を立てるといふ意味に過ぎない。生計を立てるには、その日その日に用ゐる爲の材料即ち種々の物資が入用である。併し物資は順々に使消費されるものであるから、何時でも不自由の無いやうに、安全な生計を立てるには、その必要な物資を豫め手配する用意を怠つてはならぬ。日々の生計に必要な物資を十分に用意して、必要に應じて思ふままに使消費する爲には、是非とも、それに相應するだけの計畫を立て、その計畫に依つて定つた秩序に従つて、不斷の活動を續けなくてはならぬ。それが所謂「稼いで生計を立てる」といふ暮らし方である。このやうに、生計に計畫を立て、活動することを經濟といひ、その一つ一つの活動を經濟行動といふのである。

經濟は人間

それであるから、經濟といふことは、物の道理を辨へる力を持つた人間だけが特有することであつて、人

特有の事實

間以外の他の動物には言ふまでもなく經濟といふことは無い。また同じ人間ではあつても、未開の野蠻人には、特に經濟と名を付ける程の行動のないことがある。なぜかといふに、動物または或野蠻人は、たゞその時々々の飲み食ひの外には、何の考も無い。またその飲み食ひにしても、時を選ばずして食ひ、量を定めずして飲み、口腹の慾を満足せればそれで良いといふ程度のもので、明日の食料を貯へる考もなければ、將來の生計に付いての計畫もない。たゞその心の慾の命するに任せて行動し、一向に秩序もなければ規律もない。例へば南洋の土人などは、豊に熟した野生の果實が、何處でも彼等待つて居るので、少しも食物の苦勞といふものがない。また晝は肌を焦す炎天であり、夜も決して寒さを感じることが無いので、着物を纏ふ心配もなく、休むにも眠るにも椰子の葉陰を宿とするから、住宅についても亦何の心配も無い。このやうに、後日の計畫もなく、物事に秩序も無く、たゞ飲みたい食ひたいの食慾のみに心を取られて、毎日を送る生活は、決して經濟行動といふことは出来ないものである。

經濟は生計上の計畫的活動

要するに、經濟とは、日々の生計を營むために必要な物資を取り入れ、その上、これを成るだけ有効に使用する目的で、それに相當した計畫を立て、一定した秩序に従つて、不斷の活動を續けることである。つまり人間だけが特別に持つて居る理性的現象を指していふのである。

二 欲望とその種類

經濟行動は

人間に、この經濟行動がどうして起るかといふに、それは、人間の欲望といふものが元になつて居る。欲

人間の欲望から起る欲望は感情と意志との結合

望といふものは、腹が減つた、咽喉が渴いたといふやうな、不足から起る感情と、その感情に伴つて起るところの、どうかしてその不足を満足とする意志との二つが結合したのをいふのである。一體、人間は誰でも、生れながら何かの欲望を持つもので、欲望の程度には大小もあり、上品・下品もあるが、欲望を持つて居るといふ一事は、人間の賢愚・老幼の差別に依つて、決して違は無い。飢えれば食べたいと思ひ、寒ければ着たいと思ふのは、皆この欲望である。彼の生れた許りの赤坊が、憐れな泣聲を立て、母の乳を求め、のは、人間の世に生れ出た赤坊の可憐な欲望であり、國と國との殺伐な争ひや、領土の奪合などは、人間の集團である國民の欲望から起ることである。この様に詮じ詰めれば、人間社會の動靜即ち行動といふものは皆、大小の欲望が起つて、これを満足させやうとする爲の活動に過ぎないのである。それ故に、欲望はただ人間が持つて居る本能である許りではないのである。

戦争も欲望から

欲望とその満足との連鎖は映畫のフィルムに類する

人に欲望の起る有様を喻へてみれば、恰も、海の渚に一波一浪の來りては去り、去りては來り、千春萬秋も絶えないと同じやうに、満しては起り、起りては満し、常に循環して暫しも止む時は無い。即ち人間の生活の實狀は、取りも直さず、欲望とその満足との場面を延長した映畫のフィルムに過ぎないのである。従つて、欲望の種類が多いことは、恰も人の容貌が人毎に違つて居るやうに、時の古今と、國の東西と、性の男女と、體の強弱と、歳の老幼と、智の多少等に應じて、千差また萬別で、とても數へ擧げる追も無い位である。併し、大體はこれを自然的欲望と、文化的欲望との二つに別けることが出来る。自然的欲望といふのは、食ひたい、着たい、住みたいといふ程度のものである。つまり人間が生命を保つ爲に、絶対に缺

自然的欲望

自然的欲望
は本能的である

自然的欲望
はまた原始的・普遍的・生理的である

文化的欲望

文化的欲望
は人為的・相對的・應分的である
自然的欲望
と文化的欲望
との對立

文化的欲望
はまた理智的である

くことの出来ない物資に對する欲望をいふのである。それ故に人間の持つて居る自然的欲望は、その性質からいへば、生存に是非とも必要な本能的欲望であつて、その分量からいへば、最も低い限度の必要の分量を越えないものである。それ故に、若しこの自然的欲望が缺けた時には、忽ち生存を脅されて、非常な差支を生ずることになる。この意味からいへば、自然的欲望は、人間が生存するには避けることの出来ないものであるから、場合に依つては、絶對的欲望とも唱へられ、また、誰にも共通する欲望であるから、普遍的欲望ともいはれる。また、その欲望の内容が至極單純である點から、原始的欲望と稱してもよい。さうして、その自然的欲望の中でも、最も重要なものは、衣・食・住に對する欲望であるから、これを肉體的欲望、または生理的欲望と名付けても可いのである。

これに反して、文化的欲望の方は、遙かに人為的の欲望であり、また自然的欲望が人の生存に必要で、絶對的に避けることの出来ない欲望であるのに對して、文化的欲望の方は相對的のものである。また自然的欲望が誰にも共通する普遍的の欲望であることに比べると、文化的欲望は人間の身分階級に應じて起る應分的の欲望である。さうして、この自然的欲望と文化的欲望との、二つの欲望が對立して居る譯は、自然的欲望は人の生存に是非とも必要な欲望であるのに對して、文化的欲望は必ずしも人の生存に必要なものではなく、たゞ、人間の品位を高める爲に必要であるといふに止るからである。さうして、文化的欲望の中の或欲望は、古來の習慣で一般に必要と認められて居るものである。それ故に、自然的欲望が肉體的欲望または生理的欲望の別名があるのに對して、文化的欲望は精神的欲望または理智的欲望とも稱せられるのである。

奢侈的欲望
は自然的欲望
の變形

奢侈的欲望
の内容

奢侈的欲望
と應分的欲望
との差別

また、本來の性質からいへば、自然的欲望に屬する欲望でも、その欲望の程度と分量との如何に依つては、奢侈的欲望とも唱へられる。例へば、食ひたい、着たい、住みたいといふ欲望は、誰にも共通普遍的單純原始的欲望であつて、その一つが缺けても、人間の生存は危くなるものであるから、その望むところの衣服なり、食料なり、住宅なりが、誰にでも絶對的に必要であると思はれる程度のものであり、また、その欲望の分量が、生存を支持するだけのものであれば、それは言ふまでもなく、自然的欲望の中に含まれるものであるが、衣服・食料・住宅でも、身に錦繡の美服を着飾つたり、膳部に山海の珍味を並べたり、金殿玉樓の中に起臥したりすることになると、自然的欲望の境を抜け出して、全く奢侈的欲望の中に入つたといふはれない。即ち、この程度の欲望を満足させることになれば、最早、人間の肉體を養ひ生存を支持する生理的欲望の範圍を出たもので、誰にも共通する欲望であるといふ譯には行かない。また、蟲干に數日を費す位に澤山の着物を箆筒に満したり、本宅の外に別荘を持つたりして、その爲に婢僕の数を増すやうなことも、生存に是非とも必要であるといふ分量を越したもので、奢侈的欲望といふのが適當である。併しながら、同じ程度や同じ分量の欲望でも、それが或場合には、奢侈的欲望といへないで、應分的欲望であることがある。例へば、知識階級に屬する人が、何かの際に着用する禮服や、會合の席上で用ゐる飲食などは、これを全廢しても、人間の生命に別條のある筈はないが、その屬する仲間の一員として、相當な儀禮を保ち、公私の業務を行ふために、職制または習慣から必要と認められてゐる。彼の外國の使臣と會合するに當つて、三鞭の美酒を酌むなども、この一例で、決して奢侈的欲望といふべきものではなく、應分的欲望の一つである。

文化的欲望はまた優越的欲望といへる

一體、文化的欲望は、高等な欲望であるが、或意味に於ては、贅澤な欲望である。即ち、繡繡の衣服や、山海の珍味などは、場合に依つては、應分的欲望として、文化的欲望の中に入れることの出来るものであるが、肉體的欲望即ち、人間が生命を保つ爲に、絶対に缺くことの出来ない物資に對する欲望の境を越えたものである。また詩歌・音楽その他の藝術に對する嗜好や、權勢・名譽に對する執着や、旅行・競技に對する興味や、調査・研究・發明等に關する熱心などの行動は、全く肉體的欲望とは關係なく、純然たる精神的欲望即ち理智的欲望で、悉く人間が他人に對する優越的感情を、十分に味はうとする欲望であるから、文化的欲望はまた優越的欲望ともいへるのである。従つて、文化的欲望の程度と分量とは、人々全く相異り、自然的欲望が人々に共通であるのとは、大いにその趣を異にして居る。

三 欲望の増加と進化

欲望の區別 世相の變遷と欲望の進化

さて、欲望を分けて、自然的欲望と文化的欲望との二つにするが、或欲望がその何れに屬するかは、その時代の社會上の習慣と、倫理上の概念とを標準として、區別すべきもので、世相の變遷・文明の進歩に連れて、欲望は常にその形を改めて、次第に高尚になり、複雑になつて行くものであり、一方には、區別の標準である社會上の習慣・倫理上の概念も、また變化して行くものであるから、欲望の分ちは一固定不變のものではない。それで、人間の望み欲するものは無限で、際涯はないから、欲望の種類もその内容も、また日に新しくなり、何時になつても、これで十分といふことは無いのである。即ち欲望は文明を生む母であつ

その子である 年齢の増加と欲望の進化

社會の變遷と欲望の進化

て、また、文明の懷で育てられる子供である。このやうに、欲望と文明とは互に原因となり結果となつて、社會の文明を進め、人間最上の欲望に進むものである。例へば、或一人について見ても、哺乳期から少年期へと、青年期から壯年期へと、中老から老年へと、年齢を重ねるに従つて、欲望も段々と進化するものである。即ち最初は母乳に對するだけの欲望であつたものが、玩具から間食へと、書籍から名譽へ、果ては家庭團樂へといふ具合に、何時とはなしに進化するものである。また、社會について見ても、野蠻時代にあつては、無衣・無帽・素足で山野を駆け廻る位は、人間の普通事であつたが、今日となつては、一通りの衣服や帽子や履物位は、誰でも用意してゐる。或は又、明治初年頃の東京では、洋服・洋傘・高帽子・巻煙草・人力車などが、如何に珍重されたかは、當時流行した錦繪の版畫を見ても知れる。洋傘を片手に差しかけた高帽子の洋服紳士が、大手を振つて銀座邊を闊歩する有様や、人力車上に意氣揚々として、巻煙草を口にしたり有様などは、風に靡く街頭の柳の枝や、電信柱・赤煉瓦の背景と共に描き出されて、今もなほ版畫商の店頭を飾つて居るが、今日の少年の眼から見れば、頗る珍奇の風俗に思はれて、感心するどころか、寧ろ噴飯する位である。實に人智の進歩・交通の頻繁・見聞の擴大に連れて、人間の欲望が増加し進化することは、各時代の風俗畫がよくこれを説明してゐる。

欲望は次第に高尚複雑になる

一體「臍を得て蜀を望む」といつて、或望を達すれば、また新しい望を起すのは、人間の固から持つて居る性質で、人間の欲望が時代と境遇とに刺戟されて、千變萬化してゐる中でも、次第に高尚になり、複雑になつて行くのは、疑のないことである。諺にも「欲には限が無い」といはれてゐる通り、人間の欲望が今後

欲望の進化は經濟の進歩を促す

も益々増進するのは當然のことであり、またさうで無ければならぬ。即ち欲望はこれを満足すれば、満足するほど、次々に前よりも大きな欲望を生ずるもので、經濟の進歩は、これに依つて促されてゐるのである。

四 欲望の満足とその手段

欲望に對する一種の説

欲望の進化が文明の向上を促すことは、既に述べたが、宗教家・道徳家など經濟思想に乏しい者の中には、この人心の自然の成行を忌み嫌つて、人間の欲望を罪惡のやうに思ふ者もある。そのいふところを聞くと、人間の欲望が餘りに増長すると、終には、それを満足させることの出来ない程度の欲望にまで進み、その結果、人間の心の中に失望・焦躁・不満・不平の念が起つて、危險思想を醸すやうになりはせぬかといふのである。併し、この説は一種の誤解である。昔の儒教の思想で、富貴は必ずしもこれを望むな。寧ろ清貧に安んぜよといつたのは、餘りに富貴を望んで、往々他を傷け世を害するものがあるのを戒しめたのである。又佛教はやゝもすれば、厭世悲觀の教のやうに説くものがあるけれども、人間が物資に對する欲望を逞しくして、終には惡事・醜行を敢てすることを戒しめたのであつて、孔子も釋迦も決して正當の欲望を抑へたものではない。その欲望を達する爲に、他を傷けたり、世を害したり、惡事醜行を敢てしたりしてはならぬ。隨つて、左様な手段を取らねば達し得られぬ様な欲望は、寧ろ、あきらめて、起すなといつた迄であつて、人間が心に欲望の起つたとき、それに就いて考慮したり、またはこれを達しようとなつめたりするのを、直に惡事とも不徳ともいつたのではない。昔から詩歌・俳句などに、人間の欲望を、排斥して居る様に見受けられ

儒教の考

佛教の考

るものが、少くない。これも亦、その欲望が起るのを、直に排斥したといふよりは、達する見込のない無理な欲望を起したり、又はその手段を選ばない様になるよりは、寧ろ、消極に安んずるの勝れるに若かずとの意を述べたまでである。

欲望満足の手段を慎む

元來、欲望の種類が多くなり、内容が豊になることは、文明生活の特徴であつて、人間はみな進んで十分に活動し、これに依つて、大いに欲望を満足すべき筈のものである。たゞ、慎むべきことは、欲望を満足させる手段であつて、かりそめにも、不善・不徳の手段はこれを避け、公明正大の手段を用ひなければならぬ。

經濟思想から見た宗教道徳の必要

世に宗教・道徳の必要あることは、いふ迄もない。經濟思想の上から、これを見れば、正當ならぬ欲望を抑へ、且その欲望を満足させる手段の、公明正大なるべきを勧める爲に、その宗教・道徳の必要が認められるのである。

欲望の満足は外界の實物に頼る

然らば、欲望の満足はどうして得られるかといふに、それには、その材料であるところの外界の實物に頼らなければならぬ。即ち飢ゑた者は食物を望み、智者にならうとする者は書籍に親しみ、祖先の祀を行ふ爲には、祭壇や供物の用意がある。この食物や書籍や祭具などは、みな欲望を満足させる爲に必要な外界の實物である。但、時としては、直接に外界の實物に頼らないでも、欲望を満足し得ることもある。昔、スピノザが、今の世でも感服されてゐる哲學を大成したのは、これは書籍や研究材料やまたはその他の外界の實物によつて得たものではなく、スピノザの心即ち内界の推理・作用によつて得たのであるけれども、スピノザ

は常に眼鏡磨を營業として居つた。その眼鏡磨で生活を維持し心身の健康を保つて、哲學研究に従事し得たのであつて、欲望の満足には、直接又は間接に外界の實物に頼らねばならぬのである。

五 財とその種類

財又は貨物
富
效用

さうして、欲望を満足させる對象即ち目的物となる實物は、直接と間接とを問はず、經濟上では共に財または物資と名づけ、物資は又貨物ともいひ、財・物資を總稱して財貨ともいふ。この財貨の多少が即ち富の多少であつて、その富が具へて居るところの、人の欲望を満足させることの出来る性質を、效用といふのである。即ち外界の實物が、人間の欲望を満足させるだけの力を備へ、その力を發揮することが出来て、始めて財または貨物となるのであり、また、その力を效用といふのである。例へば、前に述べた食物や書籍や祭具などは、財または貨物と名づけられ、また、飢ゑた者の食慾を満足させる食物の力、人間の知識慾を満足する書籍の力、祭祀を無事に進行させるに役立つ祭具の働き等は、みな效用といはれて居る。

財も欲望の變化に連れ

然も、人間の欲望は時代と境遇とによつて、非常にその種類と内容を異にするものであつて、その欲望を満足させる對象即ち目的物となるところの財といふ考も、また、欲望の變化に連れて變るものである。例へば、古代の人は地下に埋藏してゐる石炭については、何等の知識もなかつたので、石炭を欲しいといふ欲望の起る筈もなく、従つて、石炭が人の欲望を満足させる對象となる理由もない。故にその當時では石炭は財ではなかつたが、燃料として是非とも必要の物資となつた今日では、いふ迄もなく財又は貨物の一つに數

自由財
經濟財

へられる。また、文明人の最も珍重する金剛石にしても、野蠻人に取つては路傍の石塊と同じことで、これを欲しいと思ふ欲望が無いから、従つて、欲望を満足させる力のあらう筈がない。これを考へると、同じ物でも、財となる場合もあり、財とならない場合もある。また、財となる場合でも、その物に對する人間の欲望の多少を標準として、重要な區別が出来るのである。いま、人間の欲望に比べて、天然に存在する分量が頗る多いか、或は無限であつて、これを得る爲に少しも心身の苦勞のかけらぬもの、例へば、空氣・光線・天然水のやうなものは、これを自由財といひ、これと違つて、人間の欲望に比べて、天然に存在する分量に限りがあつて、相當の勞力が報酬かを提供しなければ、手に入れ難い財を經濟財と稱へてゐる。つまり、效用をもつてゐる點からいへば、自由財も經濟財も同様であるが、吾々が常に財または貨物といふのは、この經濟財に限られてゐるのである。勿論、自由財でも、決して人間に無用のものでなく、その效用は偉大なものであるが、これを得る爲には何の困難もない。また、自由財はその使用を節約する必要もなく、後々の爲に貯へる必要もない。それは、何時でも自由にこれを得ることが出来るからである。従つて、經濟のことにしては、自由財については少しも考へる必要はないのである。尤も自由財の中にも、その使用を節約する必要がある場合もあるが、その事については後に説くこととする。これに反して、經濟財は實に經濟活動の目的物即ち對象物となるものであつて、その天然に存在する分量には限りがあるから、誰でもこれを望んで已まなけれども、思ふまゝにこれを得ることは出来ない。他人がこれを求めて來ても、無條件で與へる者はない。これを與へるには通例、その效用に相當するだけの報酬を要求するものである。また、經濟財を得る

經濟財は經濟活動の目的

自由財が經濟財となる場合もある

爲には、絶えず心をその事に配ると共に、一度、手に入れた經濟財については、その效用を失はせないやうにして、他日の爲にこれを保存する注意を怠らないやうにするものである。

一體、自由財は經濟上その必要を認められないものであるが、人間の欲望と、自由財の存在する分量との比例の如何によつては、自由財も、時として經濟財に變ることがある。例へば、潛水器の中に送り込む空気が、水道の水などは、最早、自由財ではなくなつたもので、疑ふまでもなく經濟財の取扱を受けてゐる。またアラビヤなどのやうに、二・三年毎に僅に一・二回しか雨の降らない地方では、遠方から水を引き、貯水の設備をするなど、水についての苦勞は容易ならぬもので、こゝでも、水はまた自由財ではなく、經濟財である。従つて水の節約も貯藏も必要になつて来る。つまり、自由財であるか、經濟財であるかは、その物の性質に依るのではなく、全くその物が或時・或場所に於ける存在の分量と、これに對する人間の欲望の大小との關係に依るのである。これと同様に、只今でこそ、土地は重要な經濟財であるが、人口の密度が今のやうでなくて、頗る稀薄であつた時代には、家の敷地でも、耕作地でも、思ふまゝに、自分のものとして使ふことが出来たので、土地は全くの自由財であつたこともある。後の世の人間が一坪の土地をも争ひ合ふやうにならうとは、昔の人は夢にも想はなかつたことである。

六 價值とその大小

價值

人間は、その欲望を満足させる目的物である財に對しては、經濟上または道徳上の理由から、これを愛重

土地も自由財の時代があつた

效用と分量とが價值の標準

する。併し、その愛重には大小種々の程度がある。この愛重の程度を名づけて、吾々はこれを價值といふ。即ち價值は吾々に取つての財の大切さの程度である。この大切さ即ち價值を生ずるのは、財の效用に在るのであるから、效用の多いと少いと、價值の大小を定める標準となるものであつて、效用の多少即ち價值の大小であるのは、當然のやうに思はれるけれども、價值の大小は、ただ效用の多少だけで決められるものでなく、財が存在する分量の多少もまた、價值の大小を決めるのに、大關係のあることを忘れてはならぬ。たとひ、效用は大きいものでも、その存在する分量の多い財は、何時でも容易に得ることが出来るから、人間がこれを大切に思ふ程度は割合に低く、従つて、その價值は大きいものではない。例へば、人間は水の恵を受けて居ることは非常なもので、一日でも水無しでは、生存することが出来ない位に大切であるが、その存在量は無限であるから、何か特別の場合でなければ、水には大きい價值は生じない。つまり、洪大無邊の自然の恩澤でも、量が無限では、人間も有り難く思はない。併し、同じ水でも、例へば、沙漠の中とか、富士山の上とかいふやうに、何かの爲に、その存在量が限られてゐる時には、相當の價值を生ずることになるのである。即ち存在量の少いものは、自然と人間に愛重せられ、存在量の多いものは、人間の尊重を呼び出すに適當しない。固より、人間が財を愛重する程度は、財に對する個人個人の考方にも依るけれども、大體からいへば、財のもつてゐる效用の大小と、財の存在する分量の多少とに依つて、定まるのである。それ故に、實際の效用は頗る大きいものであつても、存在量に限りの無い自由財には、全く價值が無く、また、穀物・木材・綿絲などは、存在量の多い爲に、效用の大きい割合には、價值が少い。これに反して、實際上の

効用は割合に少ないが、存在量の頗る少い金剛石や、その他の寶石や、貴金屬などの價値は非常に多いのである。

七 價値の産出と經濟の本態

價値の産出

そこで經濟活動では、欲望を満足さすべきものを、その存在量の多少に應じ、又その價値の高低に應じて、それ相應に産出し、しかも成るだけ効用の最も大きい方法で消費しようとするのである。存在量の多いもの、價値の低いものは、これに對する欲望が自ら満足され易いから、これ等は、存在量の少く價値の高いものに比べて、それ程多額に産出するには及ばない。併し、何れにしても、その効用を出來得る限り大きくさせて、これを消費し、成るだけ多く欲望を満足させることが、經濟活動の第一の目的である。

經濟活動の第一本態

このやうに、欲望が最も大きくて、存在量の最も少いものを、最も多く産出して、最も多くの欲望を満足させる爲に消費するのである。この産出から消費までの秩序ある進行が、即ち經濟の本態である。言ひ換へれば人間が生計を立てるといふのはこの事である。

價値の取得には犠牲を要する犠牲は生産と購入の二つ

すべて、人間は成るだけ多くの欲望を、成るだけ完全に満足しようとして、銘々が一生懸命の活動を續けて居るのである。併し、人間が最も欲望するところの價値あるものは、これを思ふまゝに得られるものではない。それを得る爲には、必ず、何か犠牲を拂はなければならぬ。その犠牲の一つは生産で、いま一つは購入である。即ち、人間が自分の欲望を満足させる價値あるものを得る爲には、自分の勞力と費用とを使つて、

經濟の本則

自らその物を生産するか、或は、自分が既に生産したところの價値あるものを提供して、他人の生産したところの價値あるものを購入するか、この二つの外に方法はない。さうして、價値あるものを得る爲に支拂ふ犠牲の分量は、生産の場合でも、購入の場合でも、成るだけこれを少くする様に努めるのが經濟の本則である。即ち、最も少い勞力と費用とを使つて、最も大きい價値あるものを生産し、または、最も少い代價物を提供して、最も大きい價値あるものを購入したならば、その行爲は正に經濟行動の最上のものである。この本則は個人であつても、社會全體であつても、苟も、經濟に關係した事柄については、絶対に遵守すべきものである。

以上の趣旨をつめて言へば、財の生産から、欲望を満足させる爲の消費に至るまでの秩序ある活動の進行は、これを經濟の本態といひ、成るだけ多くの欲望を、成るだけ完全に満足させること、竝に、成るだけ少い犠牲を以て、成るだけ多くの欲望を満足させることが、經濟の本則であるといふのである。

元來、欲望の性質といふものは、一つの欲望を満足させれば、また、次に新しい欲望が起り、大きい欲望を満足させれば、さらに、それよりも大きい欲望を生んで、次から次へと、連鎖として受けついで涯のないものである。この満せば起り、滿せば起つて、涯のない欲望の續出向上は、つまるところ、人文發達の要素となるもので、あらゆる文明の進歩は、人間の欲望に刺戟されて生れるものである。そこで、個人生活の道徳から見ても、社會經濟の道徳から見ても、いま、世の中に行はれてゐる單純生活といつて、衣・食・住・交際その他一切の事柄を、出來るだけ、簡單にしようとすることは、一概に非難すべきことではないが、

欲望の續出向上は文明進歩の要素單純生活の利害

併し、生活を向上し、これを進化するその方法があるにも係らず、たゞその簡易なことを期するのは、却つて、心身の緊張を失ひ弛緩を招きがちとなるのである。若しも、社會全體が、このやうに、生活の調子を低下するやうになつたならば、人間の心身を刺戟するものがなくなつて、人文の發達も、文明の進歩も、大いに妨げられることになる。かやうな社會生活は決して幸福なものではない。かの印度・支那を始めとして、東洋民族の現状は、よくこの事實を證明してゐる。この事については、前にも述べたのであるが、妄に、人間の天眞の發するところを遮つて、たゞ徒に欲望の抑制を強ひたところで、結局は世間でいふところの、角を矯めて牛を殺すといふことになる許りである。また、文化的欲望は、人間の優越感を十分に味はうとする自然の情意であつて、その欲望を堰き止められては、前途の希望も、行手の光明も無くなつて、人世を悲觀することになる。

それ故に、經濟の方から考へると、世の中のすべての人間が、十分な財貨を得て、十分にその欲望を満足させ、社會のあらゆる人間が、最も高級な生活を営み、また、誰でも心身に餘裕ある生計を立てることが、最も望ましいことである。

經濟行動の望むところ

第二講 社會の經濟

一 個人の經濟と團體の經濟

生計と個人

經濟とは生計を営むことに外ならぬのであるが、人間は誰でも自分だけの生計を立て、居るものであるから、經濟行動の主體は、個人個人である。併し、社會の裏表を精しく觀察すると、人間の生活は、頗る多方面に關係して居る。即ち、稀にある例外を除けば、人間は決して自分一人の力だけで、生計を立て、居るものではないといふことが判る。例へば、衣服・食物・住宅などについて見ても、その大部分は、他人の生産したものを購入して居るのである。個人個人は、その本職でない限りは、一本の針でも、一枚の紙でも、自分だけの努力と費用とで、自ら生産するものではない。自分の衣・食・住その他に使ふ種々の物資は、大部分、犠牲の一つである代價物を提供して、他人から購入したものである。

代價物を拂つて購入した物資でも、自ら生産した物資でも、生計の用に役立たせるには、その儘で直ぐに役立つものは非常に少い。これを役立たせるにもまた、人間の努力と費用とが入るのである。即ち、買つて來た反物を着物に仕立てるには、物指も入れれば、鈔も糸も入る。また、寸法を計つたり、裁つたり、各部分縫つたり、纏めたりする努力も入る。食物でも、住宅でも、皆その通りで、米を買つて來ても、薪や瓦斯がなくては、炊くことは出来ない。磨いだり、水加減をしたり、火を焚いたりする努力が入る。障子を張り

かへるにも、紙を買つて来た上に、糊も入れれば、張る勞力も入るといふ具合に、勞力と費用とをかけないで、實際の役に立つものは、殆ど一つとして無いのである。ところが、これ等の種々雑多の仕事を、自分一人の力で始末をつけて行くことは、出来るものではない。假に千手觀音のやうな人間があつたとしても、この様な日常の雜事に苦しめられて、心も體も全く疲れ果てたなら、人間として、それ以上の更に大きい欲望を満足させる力を失ふことになるのである。

家族と協力

個人經濟

そこで、一家内の人々と、その勞力を分けるといふことになる。即ち、一家族が一團となつて、その指揮者である世帯主の定めた計畫に従つて、一定の秩序を立て、家族の一人一人は、長幼・男女・能否の別に依つて、各その性質・能力に適當する仕事を受け持つことになる。また、肉親の家族だけで、勞力の不足するときには、自ら生産した價値を提供して、外から使用人を雇ひ入れることもある。また、家族の中の或者は、日常の衣・食・住は、家族の一團と共にして居るけれども、別に自分だけの勞力で、多少なりとも外部から價値を取り入れて、獨立の經濟を立て欲望を満足して居ることも少くない。嚴格に言へば、この様に、個人個人が單獨に營む生計を、個人經濟といふのであつて、數人乃至數十人から成る一家族の經濟は、一種の共同經濟・團體經濟であるが、現今、普通には、家族といふ一つの小團體が營む經濟、即ち家族經濟をまた個人經濟といふのである。

この様に、人間は全く孤獨では、生計を營むことが出来ないで、先づ、家族の一團が互に協力して、生計を營むことになるのである。この様な家族もまた、その一つの家族だけで、他の者と全く無關係では、人

社會經濟

共同生活の爲に起る欲望

國家・市町村の經濟體等なる共同經濟

間としての欲望を、十分に満足させることは出来ない。そこで、家族が多數相依り相助け、有るものと無いものとを交易して、小さい社會を作り、相互に欲望の満足をし合ふ様になり、それが更に進んで、今日の様に世界といふ最大の社會となつて、複雑な社會經濟を營んで、人間の欲望を十分に満足させようとする事になつたのである。昔アリストートルが喝破したやうに、「人間は群居的生活をなすもの」で、彼の絶海の孤島に漂流して、たゞ一人で生活したロビンソンクルーソーも、誰と語ることも出来ない淋しさに堪へ兼ね、鸚鵡を飼つて、これと言葉を交し、僅に他のものと語り合ふといふ欲望の一部を満足して、自ら慰めたといふことである。即ち、人間は、一人よりは家族、家族よりは社會といふ様に、群居協力して、その欲望の満足を図るのが常態である。

多數の人が共同群居して、生計を營むからには、その共同生活をなす個人個人の欲望の外に、その全部の者に共通する欲望が起つて来る。交通の欲望が起つて、道や橋が出来、治水の欲望が起つて、堤防を築き、防火の欲望の爲に消防が出来るのである。その他、學校・衛生等の諸機關を整へたり、農事の改良・町内の繁榮を講じたりするのも、共同の欲望から来ることである。さうして、これに要する費用は、共同集團の一員である各個人から、割前を徴集してこれに充てる。この様に、共同團體もまた、共同生活といふ一種の生活を營むものであるから、共同團體は一つの經濟の主體で、その經濟を共同經濟といふ。國家の經濟・市町村の經濟・團體の經濟などは、皆この共同經濟である。

さて、大昔は、社會といつても、僅に一部落とか一氏族とかいふ様に、狭い範圍の人々から組織された、

任意的團體
と強制的團體
國家は強制的
團體の最大
なもの

小さな社會に過ぎなかつたのであるが、段々とその範圍が廣まつて、共同關係が進むやうになつて、各個人は一方では、職業社會・政治社會・教育社會・宗教社會などの様々の、任意的團體へ加はることとなり、また、他の一方では、市町村・府縣・國家などの、強制的團體へも加へられることになつて、それらの共同經濟に仲間入をしたのである。強制的團體の中で、最大のもは國家で、國家は實に最高の權威を有する團體組織である。

財政と租税
及び手数料

この様に、各個人が、それらの任意的または強制的の各團體へ、加入するやうになつたのは、つまり、人間の欲望が大きくなるに連れて、微々たる家族經濟だけでは、到底十分にその欲望を満足させることが出来なからであると同時に、經濟の安全をも望むことが出来なからである。それであるから、各種の團體及び國家といふ最高の團體の一員となつて、自己の欲望を十分に満足させ、また、國家の力に依つて、生命・身體・自由・名譽・財産等の、保護を受けて居る以上は、これに要する費用は、當然、その團體の一員である各個人の負擔すべきものである。それで國家といふ共同團體の經濟を特に財政といひ、その負擔を租税又は手数料と名付ける。府縣・市町村にもまた、同じやうに經濟も負擔もあるのである。

二 所屬關係と交易關係

人間が、共同團體を作つて居る以上は、人々の間に種々の關係を生ずるのは勿論で、社會に對する道德・國家に對する道德等も、その關係の一例であるが、經濟のことでも深い關係がある。即ち、家族團體の一員

個人經濟と
共同經濟と
の關係
縱の關係と
横の關係と

である各個人は、また、共同團體の一分子である。この家族團體の個人經濟と、共同團體の共同經濟との關係は、二つに分けることが出来る。その一つは縱の關係といふべきもので、他の一つは横の關係といふことが出来る。もつと、判り易く言へば、縱の關係は、所屬關係といひ、横の關係は、交易關係といふことが出来るのである。

縱の關係即
ち所屬關係
間接の保護
と直接の保護

先づ、縱の關係即ち所屬關係とは、如何なるものであるかといふに、家族といふ社會は、國家を構成する一分子となつて、國家に屬し、その保護を受けて居る。また、國家の下にある府縣・市町村へも加入させられて、その保護をも受けて居る。さうして、國家から受ける保護は、やゝ間接であるのに比べて、府縣・市町村等の下級の團體から受ける保護は、直接である。別にまた、共同社會の一つである社交・教育・宗教等の諸團體へも加つて、それらの目的の欲望を満足させてゐる。併し、縱の關係即ち所屬關係によつて、國家・府縣・市町村・各種の組合その他の共同團體の團體經濟から、受ける欲望満足の分量は、僅に欲望の一小部分に過ぎないもので、直接の欲望は勿論のこと、間接の欲望もその大部分は、家族經濟・個人經濟によつて満されて居るのである。

横の關係即
ち交易關係
欲望の満足
は交易關係
と重大な關係
がある

これに反して、社會に於ける各家族の家族經濟・個人經濟は、横の關係即ち、交易といふ關係によつて、相互に結び付けられて居て、この關係は各個人・各家族の欲望に、頗る重大な影響のあるものであつて、吾々の經濟に關する欲望の殆ど全部は、その満足を得るや否やが、この交易關係に支配されて居るのである。以上述べたところの、所屬關係と交易關係とによつて、相互に結び付けられて居る多數の各種經濟主體の

經濟社會
國民經濟

集團を、經濟社會といふのである。さうして、この集團全體の經濟即ち經濟社會の經濟を、外部から一括して見て、社會經濟といひ、その集團が一國民全體を含んで居る場合には、これを國民經濟といふのである。

三 交易關係の發達

自給經濟
たは自足經

交易經濟の
狀態

昔、人智の發達が幼稚で、人間の欲望も至極單純であつた時代や、今日でも最も野蠻な人民は、經濟の關係がその家族だけに止まるものである。各家族は、それ／＼經濟の主體となつて、殆ど全く他に頼ることなく、各家族は、それ／＼自ら入用の物資を生産し、その自ら生産した物を自ら消費して、全く他と交易を行はない場合が少くない。このやうな經濟を、自給經濟または自足經濟といつて、經濟發達の最も幼稚な状態である。ところが、人智が進んで、欲望が發達するに連れて、その満足を得るために、一方には、共同團體の經濟が發達すると共に、他の一方には、各個人や各團體が、相互に物資の有無を融通し合ひ、技能の長短を補ひ合ふところの經濟行爲、即ち、交易の關係が、段々と發達して來た。さうして、各個人・各團體の經濟が、この交易關係によつて、立てられる様になると、その状態を交易經濟の狀態といつて、經濟上大いに發達した社會状態とせられるのである。

交易の起り
交易關係の起り

交易關係の起源は、我が國で最古の書物である「古事記」に、太古、火闌降命といふ神は、海に漁りして多くの魚を得、彦火々出見命といふ神は、山に狩して多くの獸を得た。或時、この神々は語り合つて、魚を釣る針と、獸を射る弓矢とを交易したとある。この神話を見ても、交易といふことが、割合に早くから始つ

交易の起る
わけ

たことが判る。

この様に、古くから交易が起り、且それが發達したのは、つまり、人間が社會の中で働いて行く場合に、各個人の能力や體力や性別などの異なるに従つて、その經濟行爲に、巧拙・遲速の差が出來て、成績に可なりの優劣があり、また、地勢の關係や周囲の事情などによつて、容易に物資を得られる場合と、苦心しても中得られない場合とがあるが、かういふ場合に、彼の餘つて居る力、または物資と、我的餘す力または物資とを交易すれば、彼と我との受ける利益は決して少くはないからである。

交易の利益

そこで、交易の利益として見るべきことは、先づ、各個人の經濟的能力に従つて、それ／＼に適した異つた仕事を擔當することの出來ることである。例へば、釣の上手な者は、海に漁し、狩の上手な者は、山に狩して、お互に技能と收穫との交易をすることになる。さうして、この交易關係の發達することは、各個人の獨得の技能を上達させる原因となることが多い。彼の家傳の祕藥とか、各地の特産物などの生産に従事する者の中には、その例が少くないのである。この様に、交易關係は、各個人の特長とするところ、または各地方の特産能力とするところを、十分に發揮させるものであるから、各個人の生産量も、各地方の生産額も、共に大いに増加し、従つて、社會全體としての生産量も増大することになる。そこで、一方には、交易經濟の利益を理解し、他方には、交通が益々發達すればする程、個人または家族を單位とする職業の種類が、益々多くなつて、いよ／＼微に入り細を極めることになる。昭和五年に施行された第三回の國勢調査の結果を見ても、世人の想像もつかない様な、變つた職業の種類が澤山にある。街頭の廣告宣傳隊であるチン

職業の種類

ドン屋や、サンドウキッチマンを専門の職業として、申告したのも多数にあるが、川や溝の底に沈んでゐる金製品の廢物を拾ひ上げることを、本職としてゐるヨナゲ業といふものが、これまた、多数にあることは、誰も驚くことである。

また、人間の欲望を満足させる爲に、必要な物資の種類は、欲望が増すに従つて、その數に限りがなくなり、とても、各個人の獨力では、これに應じ切れない。このことに付いては、前にも詳しく述べたが、若し、各個人が、銘々その特長の技能によつて生産した、二・三種づつの物資を提供し合ふことにすれば、非常に多い人間の欲望も、この方法で、容易に且十分に満足させることが出来る。さうして、この様に、非關係が遍く發達した社會では、その社會を作つて居る分子と分子、即ち各經濟主體の相互の關係が、ますます密接になり、また、頗る堅くなるのである。これに反して、若し、この交易が一時中止になるとか、または、全く交易を拒絶されたとしたならば、人間の本来の性質が、群居交際を望むものであるだけに、その心を受ける苦痛が非常なものである許りでなく、その欲望を満足させる爲に必要な、物資を得ることが出来ないの

で、多くの人は、空しく坐して死を俟つの外はない状態に陥るであらう。例へば、天災・地變とか動亂突發などの非常時に、交易關係がたゞ一時休止するだけでも、錦の囊を抱き黄金を懐にして、なほ、飢に泣き寒さに凍える者の出来るのは、各國の歴史にその例が少くないのである。近くは、大正十二年九月の、關東大震災でも、これに似た有様であつた。

さうして、社會の發達を見ると、大昔は各家族がそれ／＼、一つの社會であつただけであるが、その後、

交易の發展

蠻民の社會と交易

安寧秩序の爲には所屬關係が勝る
爲には所屬關係が勝る
爲には所屬關係が勝る
爲には所屬關係が勝る
爲には所屬關係が勝る
爲には所屬關係が勝る
爲には所屬關係が勝る
爲には所屬關係が勝る
爲には所屬關係が勝る
爲には所屬關係が勝る

自給經濟と交易經濟

氏族社會が出来、近隣社會が出来、遂に、國家社會といふ非常に大きい社會にまで、發達を遂げたのであるが、交易關係もまた、一部落・一村・一郷の相互の關係から、順次に、その範圍を廣めて来て、遂には、今日の様に、世界各國の交易關係が生ずる様になつたのである。さうして、これ等各種の社會の經濟の關係も、また、或は横斷的の交易關係によつて結び付き、或は縱斷的の所屬關係によつて結び付けられ、またその上に、交易關係の横斷と、所屬關係の縱斷とが、十字形のやうに交叉して、その社會を作つて居る分子の利害が、頗る密接である經濟社會を形づくる様になつたのである。但し、現今でも、アフリカ蠻民の一部などでは、社會も部落社會に止まり、交易關係もまた、部落内だけに止まつて居て、一地方とか、一州とかいふやうな、廣い範圍に亘る縱の關係も、横の關係もないといふことである。

さうして、現今、各個人・各家族が、これ等の各種團體の施設、殊に、安寧・秩序を保つためにする國家の施設を頼みとするには、ますます、深くなつて来た。けれども、各個人や各家族が、所屬關係によつて、國家及びその他の團體から受ける利益は、たゞ經濟の方だけからいふと、經濟全部の一小部分に止まるもので、欲望を満足させることの大部分は、交易關係によつて満たされて居ることは、前に述べた通りである。

さて、昔の家族經濟では、各個人の技能は、その家族の欲望を満足させる爲に必要な、勞作だけに使はれて居た。言ひ換へると、自ら耕して自ら食ふといふ自給經濟の状態であつたので、その生産する物品の種類も分量も極めて少く、欲望を満足させることは、無論に不十分であつた。ところが、交易關係の行きわたる

交通の發達と交易

交通の發達と分業

小都邑が出來た

城下

地方經濟時代

國家全部を舞臺とする交易

今日の狀態では、各個人や各家族は、最早、以前の様な手製の粗衣・粗食に甘んずる必要はなくなつた。

さうして、交通の發達するに連れて、交易關係も段々と、その範圍を廣めて來た。即ち、最初は交易關係は、それ／＼の一地方だけに限られ、その範圍内で日用品の交易を行つたものであるが、その後、交通が發達するに伴つて、農・工・商その他の専門業が出來ることになり、それに便利な土地を見立て、其處に居所を定める様になつた。即ち、農夫は山の近くに住み、漁師は海の近所に居を定めて、各その専門業によつて得た物資を、職人の住む町へ持ち出して、職人の作つた物資と交易するといふ慣例を作つたので、その交易の中心となる小さい都邑が、國の各所に出來るやうになつた。足利時代の我が國や、中世紀の歐洲の地圖を見ても判る様に、各地方には二・三里または四・五里位を距てた所に、大抵一つの都邑があつて、農夫や漁師などは、その都邑を取り巻いて住んで居り、四方から此處へ集つて來て、その時々々の交易を行つたものである。この様な小都邑は、その後交通の發達するのにつれて、全國の至る所に出來る様になつた。

また、封建制度の時代には、藩公の居城の在る都邑は、城下と呼ばれて、此處が、たゞその地方の政治の中心であつた許りでなく、交易の中心にもなつて居たのである。この様に、地方の小都邑を經濟の中心として居た時代を、地方經濟時代と稱するのである。日本でも、歐洲でも、二・三百年前までは、この地方經濟時代であつたのである。

かうして、交易關係は更に發達して、その國家社會の全部を舞臺とする様になり、また、それと關係して、國家の組織が確になり、國內の各種の交通機關が發達して、交通網がますます細密に各地方に行き互る

樟腦と鮭

國民經濟の時代

世界經濟の時代

現代は現代國民經濟の時代といへる

様になり、各地方相互の交易も頗る廣く、且自由に行はれる様になつた。その結果として、各地方相互の距離は、著しく縮められたと同様になり、國內の各地方は、相互に自由自在に交易關係が出來る様になつた。例へば、北海道に住む者は自ら樟腦を作らずとも、自由に臺灣産の樟腦を求めることが出來、臺灣の人々は自ら鮭を取らずとも、これを買へば手に入れることが出來る様に、相互にその生産した物を交易すれば良いこととなつた。この様に、交易關係が普く一國內に行はれる様になつた時代を、國民經濟の時代といふのである。

併し、近世に至つて、交易關係は、一國內に行はれるだけでなく、段々と、諸外國とも行はれる様に發達した。即ち、現在我が多數國民の衣服の原料である棉花は、米國や印度や埃及の産出であつて、歐米婦人の姿を彩る絹織物は、實に我が日本の産物である。その他、建築用には、アメリカの松材を使ひ、ブラジルの珈琲や、イギリスのウキスキーなども、場末の小店にさへ、これを見る様な次第である。そこで、或學者は、現在を世界經濟の時代といつてゐる。併し、各國相互の經濟關係即ち對外交易は、これを國內の各地相互の交易關係及び各人相互の交易關係と比べると、今でもまだ、甚だ小さいもので、吾々の欲望を満足させることから考へると、對外交易から受けることは、内國交易から受けることの一小部分にしか當らない。現在では、交易關係の發達は、まだ國民經濟時代といつて可い。

四 代價の發現と經濟活動の目標

物々交易

物々交易の不便

交易媒介の必要

貨幣

賣買

自給經濟から、交易經濟に移つた許りの頃は、その交易の形式も頗る幼稚で物々交易であつた。即ち、米一升と魚二尾と交易するといふ様に、物資と物資とを直接に交易し合つたものであるが、欲望の種類と物資の種類とが、共に増加するに伴つて、交易關係もますます複雑になつて、この様な幼稚な形式を續けて居ては、完全に交易を行ふことが困難になつて來た。即ち、物資と物資との直接交易では、相互の欲望が、びつたりと合はない様になつて來て、交易が中々思ふ様に出來なくなつて來た。

そこで、物資の價値を定める標準になり、また、交易を容易に、完全に行はせる媒介物が必要になつた。その必要に應じて、現れたものが貨幣である。貨幣が現れると、交易の形式は全く改つて、交易は頗る圓滑に行はれる様になつた。即ち、交易を行はうとする者は、先づ、自分が他人に渡さうとする物資を、賣り拂つて貨幣に換へ、次にその貨幣を以て、自分の望む他の物資を買ひ入れるといふ順序になつて、交易を行ふには、賣ると買ふとの二段の手續をすることになつた。例へば、米一升を以て、直接に、魚二尾と交易するのでは無く、先づ、米を賣つて貨幣を得、次にその貨幣を以て魚を買ふことになつたのである。交易の形式がこの様に改つたので、お互の欲望する物資と物資に、效用や分量の合はない様な不便は、全く無くなつたのである。

この場合に、米を賣つて受取つた貨幣の分量と、魚を買つた時に拂つた貨幣の分量とは、一致するとは限

代價

經濟活動の目標

自給經濟の時代は效用本位

交易の時代は價格本位

らない。兎に角、米と取り換へた貨幣の分量も、魚と取り換へた貨幣の分量も、共に代價または價格と名付けられるものである。即ち、代價または價格といふのは、交易をする時に、相手の物資に對して、自分の物資を渡す代りに、相手に渡す貨幣の一定量のことである。更に、簡単にいひ縮めれば、物が貨幣と交易される割合をいふのである。

この様に、自給經濟から交易經濟へ進み、交易經濟も、初めに行はれた物々交易から、進んで、貨幣を媒介物とする間接交易となり、こゝに初めて、代價即ち價格といふものが現れ、人間が經濟活動の目標とするものは、本質的には差違はないが、形式的には全く一變して來たのである。即ち、自給經濟の時代では、自分の欲望を本として、その欲望を満足させる效用の最も多いものを得るのが、經濟活動の目標であつたが、交易經濟の時代となつて、貨幣を使用することになると同時に、經濟活動で吾々が先づ生産し、または獲得しようとするものは、その物が直接に自分の欲望を満足させることが、出来るか否かではなくて、社會の欲望を満足させることが出来るか否かを主とする様になり、社會の欲望を満足させるに適する物、即ち、價格の最も高いものを、生産または獲得することを、經濟活動の目標とする様になつたのである。例へば、自給經濟の時代では、自分の持つて居る米で、酒を醸造したが良いか、菓子を製造したが良いか、この二つの中一つを選ぶときに、自分の效用を主として、上戸ならば酒を醸造し、下戸ならば菓子を製造したものであつた。即ち、上戸は酒を醸造することが、米の最大效用を發揮したもので、下戸は菓子を製造することが、米の最大效用を發揮したものであつた。言ひ換へると、上戸も下戸も、自分の欲望を本として、自分に最も

酒飲みが菓子好きが酒を造ることもある

效用の多い物を生産することが、経済活動の目標であつたのである。ところが、交易経済で、貨幣を用ゐる時代になつては、物資の生産または收得を目的とする経済活動をするときに、少しも自分の欲望を顧みないで、若し、酒が社會の多數の者の欲望するもので、その価格が高いならば、自分の最好物は菓子であつても、また、自分は一滴の酒も飲まないでも、酒を醸造するのである。つまり、自分の欲望は問題でなく、價格の多少が目當になる。言ひ換へると、自分に必要であるか否かは問題でなく、代價の高い物を生産し、成るだけ多くの貨幣に換へて、自分の欲望する物は、外から買入れるのが得策であることとなるのである。

即ち、吾々の経済活動からいへば、自給経済は效用本位の経済で、交易経済は價格本位の経済である。自給経済の場合は、言ふまでもなく、一個人・一家族の欲望を目當にするが、交易経済の場合は、社會多數人の欲望に在るのである。他の言葉でいへば、専ら物資の價格を對象として、多量の貨幣を得ることを志すのである。さうして、吾々の生産または收得した物が、社會多數人の欲望に當て嵌つて、價格が高く、従つて多量の貨幣を得ることが出来れば、吾々は自分の欲望する物資を得る購買力が豊富になつて、自分の本來の欲望を満足させることが、容易になるのである。

米と苺

例へば、一段歩の土地に、米を作れば五十圓の收穫に過ぎないが、苺を作ると二百圓の所得があると假定すれば、米の飯は必需品であるけれども、苺は飯の代りにならないといつて、價格の高い苺をやめて、價格の低い米を作るものはあるまい。つまり、社會全體から見て、その最も欲望するもの、従つて價格の最も高

いものを目標として、土地を使用することが、交易経済の本旨でもあり、また、經濟の本則にも適ふことでもある。

このやうに、土地でも、努力または資本でも、價格の最も高い物を生産する時に使ふことは、社會全體から見ると、欲望の最も大きいものが、最も多く生産され、最も多く消費されることになる。即ち、社會全體の生産量と消費量とが、平行して増加して進むことが、取りも直さず、社會の經濟の發展である。さうしてその目的を達するには、何をさし置いても、先づ、生産量の増加を圖らなければならぬ。若し社會に於て、物資の消費量だけが増して、生産量の増加が、これに伴はなければ、結局は、社會に於て、必要な物資が不足することになり、従つて、多數の人々の欲望が満足されないことになる。言ひ換へると、財の分量が減少し、即ち社會の富が減少して、多數の人々の欲望が満足せられなくなるのである。

五 公私經濟の利害の衝突とその調和

交易經濟の立場から考へると、社會に於ける私人的の利益、即ち、私經濟で利益を得ること、社會全體の利益、即ち、公經濟で利益を得ることとの、二つの利益が、一部分一致しないことが、間々起るものである。つまり、公私二つの經濟の利害が、一部分衝突することが、時々起つて来る。例へば、我が國の米の一年間の生産量が、六千五百萬石である時に、その價格は、一石當り二十五圓を維持してゐると假定したならば、その年産額が六千萬石に減少した時は、米價は米の生産量の減少とは反比例して、一石當り三十圓見當

私經濟と公經濟

米が少くなれば高くなれば多くなれば安くなる

に昇るかも知れない。また更に、年産額が減つて五千五百万石になつたとすると、米價は遂に、一石當り四十圓臺の高値になるものである。即ち、米の生産量が減れば減る程、反對に米價が高くなるのは、社會の全體が、米を愛用する程度は、米の生産量の減少するにも拘らず、決して減少せず、却つて増大して來るからである。言ひ換へると、米の供給が需要に比して不足になり、需要超過すれば、米價は高くなり、これに反して、米の生産量が増加すれば、する程、米の需要がこれに伴はず、隨つて供給過多となり米價はこれと反比例して、次第に安くなつて來るのである。

供給過多

需要超過

つまり、交易に用ゐる物資の分量が減少して、需要がこれに超過すればする程、その價格は高くなり、その分量が増加して、供給過多となれば、なる程、その價格は安くなる。今、世の中には、米の飯を十分に食はない者もあるのであるから、社會全體の利益から見れば、米の生産量を成るだけ多くすれば、社會の多數人は、その欲望を満足させる許りでなく、食用に使つた残りでは、酒を醸造するなり、菓子を製造するなりしたならば、甘黨も辛黨も満足して、社會としては、この上もない幸福である。即ち、公經濟の爲には、大いに利益であるが、米の生産者である農業者から考へると、米を多く生産すればする程、價格は安くなるので、農業者の私經濟からいへば、決して利益とはいはれない。即ち、私經濟の利益と、公經濟の利益とは、往々、利害の衝突を起すことを免れない。

米が多くて喜ぶ者喜ばぬ者

更に、他の例を引くと、大量生産を行ふ大工業の中でも、紡績業などは、一般に、晝夜兼行で、その生産を營んでゐるが、綿絲の供給過多となる時は、必ず、その價格を維持して行けなくなるのである。そこで、

生産の過剩

高い價格を維持し、または一層これを高くする目的の爲には、夜業を休むとか、作業時間を短縮するとか、または従業員を減すとかするのである。若し、作業を制限して、三割方を縮小した爲に、生産量も三割方減少し、綿絲の價格を三割方高めたとすると、紡績業者の利益であることは、言ふまでもない。併し社會全體の利益から考へると、綿絲や綿布の値が高くなつては、甚だ迷惑で、社會全體の欲望の満足は、これが爲に妨げられるのである。

六 生産の増加と分配・消費

これ等の公私經濟の利害の不一致については、世の社會主義者が、現代の交易組織に横はる一大弊害であるとして、攻撃して居るところである。成る程これに善處することは、時に依り場合に應じて、容易ではないけれども、併し、必ずしも善處するの手段が無いことはないものである。即ち、米なり、綿絲なりの購入者たちが、銘々にその生産力を増加すれば、米や綿絲の價格が高くて、調和は保たれるのである。また、米なり、綿絲なりの購入者の生産力が、未だ十分に發揮されて居ないので先だちて、米なり、綿絲なりの生産力だけが、群を抜いた場合に於ては、一面には、米なり、綿絲なりの生産を縮小すると同時に、他の一面に於ては、その購入者の生産力を増加して、その調和を保たしめることも出来るのであつて、生産過多の爲に起る當業者の大損失を防ぐ爲には、一時的の作業縮小も、生産制限も亦やむを得ないのである。否、寧ろ、當然のことであるから、これを攻撃するよりも、社會全體に於ける他の方面の、生産の増加を圖ることが、

社會主義者の攻撃

最も大切な策である。

また、米なり、綿絲なりの値段の下落に頓着なく、當業者に生産の増加を強ひたならば、當業者は値段の惨落に堪へ切れなくなつて、それからそれからと倒産することになる。その爲に、社會の多數人は、一時は大いに安い米なり、綿絲なりを得ることが出来ても、結局は、米や綿絲の生産者は、その資本を失ひ、その生産力を失つて、社會の消費力だけが残ることになり、物資の大欲乏となつて、社會の富が自ら減少し、随つて人々の欲望は、全く満足されないことになる。

公私經濟の衝突の調和
生産發展
生産統制

經濟行爲の本來の目的

それ故に、これ等の公私經濟の、利益の一部分の衝突を、調和する爲には、或はその供給が割合に不足である、その他の産業を發展させて、各種の生産物資が互に平均を得る様になり、一切の物資が社會の全員に遍く行き渡つて、過不足なく分配される様にするか、或はその供給過多であるものは、これを抑へてその生産量を減じ、一方に不足であるものは、これを發展させて、爲に平均を得させる様に雙方を都合よく統制するか、これ等は經濟行爲として、個人經濟にも、社會經濟・國家經濟にも、實に重大の關係を有するものであつて、何よりも緊要のことである。故にこの點については、更に説明する積りである。要するに、交易といふ經濟行爲は、生産された物資が分配されて、銘々の手もとに渡され、銘々が欲望を満足させる爲に、悉く、これを消費するに至るまでの間に、經過する順路をいふのであつて、經濟行爲の本來の目的は、正しい欲望に従つて、思ふままに、物資を消費することの出来る様に、十分の供給をする一事にあるのである。

第三講 生産の要素

一 生産の三要素とその消長

人間がその欲望を満足させて、經濟上の目的を達する爲には、個人でも社會でも、大いに生産の増加を圖らなくてはならぬ。その生産を増加する爲には、先づ、生産の意義を十分に呑み込んで、巧に善處することが肝要である。

生産

生産とは、決して無から有を生み出すことではない。人間は造物主ではないから、その様な力はある筈がない。即ち現に存してゐる外界の實物に力を加へて、或はその形態を變へ、或はその位置を移し、或はその性質を變更して、人間の用に役立たせる行爲を指していふのである。

生産の行爲は實物の現在位置を變へずの性質を變へるものである
實物を合體消費するの行爲も生産の行爲である

例へば、山林の立木を製材して、家を建築するなどは、實物の形態を變へること、地下の石炭を掘り出して、工場や家庭などの燃料とするなどは、實物の位置を移すことである。又木材を原料として人造絹絲を造つたり、石炭から種々の染料を製造したりするなどは、實物の性質を變更することである。つまり、實物現在の形態・位置・性質のままでは、效用の無いものを、力を加へて、效用のあるものにする行爲である。この外に、その實物が單獨では、効用なく又は效用の少いに係らず、他の實物と併せて、人間の欲望を満すに足るものを、生産する場合が甚だ少くない。

土地
労働力
資本
生産の三要素

生産には、先づその材料となるべき物資が必要である。種々の物資就中自然物の中には、存在量が殆ど無限で、思ふまゝに得られるものと、存在量に限りある物とがある。生産の要素となるものは、有限の物資である。例へば、空気や水は、非常に必要なものでありながら、存在量が殆ど無限で、生産の要素とはならないが、その他の物資の多くは、存在量が有限で、生産の要素となる。さうして、土地は天然の物資で、且生産の爲に必要な場所となるものであるから、特に必要を認められる要素である。それ故に、天然の物資の代表として、土地及びこれに附随する自然の物資を一括して、一つの生産要素と認める。また、これ等の物資を利用する爲には、人間の勞力と、勞作の結果から成る所の設備その他の資料が必要である。これ等の設備や資料は、過去に生産されたものの中で、直に消費されないで、將來の生産に用ゐる爲に保存されたもので、普通これを資本といふ。そこで、土地と勞力と資本のこの三つが生産の要素となるものである。三要素が充實すればする程、生産の分量は多くなり、品質は良くなる。その反對に、これが不足すればする程、生産の分量は減り、品質は悪くなるから、個人經濟でも、社會經濟でも、この三要素を充實させることが、生産の第一要件である。併し、たゞ三要素の増加だけでは、生産が増加するとは限らない。三要素の組み合わせ方、即ち、生産組織の優劣が非常に關係するものである。例へば、同じ面積の土地でも、肥料の施し加減や、耕作の上手下手によつて、その生産量に相違がある。また、工業を営むにしても、指揮者の能力の優劣・人員配置の巧拙・原料使用の良否などに依つて、生産量が違ふ。かういふ風に、三要素の組み合わせ方に依つて、生産量の多少や、品質の良否に、大きな關係があるから、先に挙げた生産の三要素に、この生

生産の組織

産の組織を加へる必要がある。併し、生産の要素を特に有形のものに限るとすれば、生産の組織といふ無形のもの、除外されることになる。兎に角、生産の組織を巧にすることは、何れの生産業にも、必要なことである。

商業・工業にも土地は深い關係がある

また、生産の三要素の中、土地は、農業に必要であるだけでなく、商業にも工業にも必要がある。先づ商業に付いて見るに、その繁昌するか否かは、資本の大小・商品の良否、その他にも關係するが、特に大切なことは店舗の位置である。昔から在る有名な社寺の近所とか、街路の交又點とかに在る商店は、何時でも繁昌して居る。如何に他の條件が整つて居ても、人通りの少い裏通りに在る商店は、大した成績が擧る筈がない。また工場に付いて見ても、港灣に臨む土地とか、鐵道の驛前とかに在るものは、原料や製品の受渡が便利で、それだけ、利益も多い譯である。即ち、土地は商業・工業の成績にも深い關係のあることが明かである。たゞ農業では、土地が生産要素の最大のものであるのに反して、工業は概して、機械などの固定資本に重きを置き、商業は商品の流動資本を主とするものであるから、農業に比べて、重要な程度が幾らか低いだけのことである。

これを要するに、土地といひ、資本といひ、また、勞力といひ、時に依り場合に應じて、その必要の程度の異なるは、當然のことであるけれども、個人經濟でも、社會經濟でも、生産上この三要素の一を缺くことは決して許さないのである。

二 労働の生産作用とその能率

労働は生産の主體

土地・資本・勞力の三要素は、生産に缺くことの出来ないものであるが、各特色があつて、生産の増減に關係する働きは異つて居る。併し、この中で最も主なもののは労働で、生産を進行させる原動力である。他の要素はこの労働の働きを受けて、生産の効果を擧げるのである。併し、その實は、土地がなくては、労働するに不可能であり、また、資本がなくては、労働するに不可能であることが、その常である。故に、土地・資本・労働の三者は、生産に對する必要に付いて、優劣はないのである。

労働の意義

労働とは、生産を目的とする心と體との活動の總稱で、假令、心と體とを活動させても、生産の目的を持たないで、たゞ動くだけでは労働とはいはない。例へば、散歩・競技・遊戯などは、活動には相違ないが、生産の目的がないから労働でない。また、労働には、必ず多少の苦痛が伴つて居るが、生産の目的の爲にはこれを辭さない。この苦痛を忍んで労働の全能力を發揮することが、生産増加の根本原因となるのである。

精神労働者
筋肉労働者

精練労働者
無精練労働者

労働は、心と體とを活動させるものであるが、主に心を活動させるものと、主に體を動かすものとの別がある。技師は設計・考案などをして主に心を勞し、職工は機械の運轉・物品の運搬・整理などをして主に體を使ふ。その主に心を勞するものを精神労働者といひ、主に體を働かせるものを筋肉労働者といふ。また、労働者には、多年の素養を必要とするものと、何の素地をも必要としないものがある。前者を精練労働者といひ、後者を無精練労働者といふ。精練労働者が、無精練労働者に比べて、遙に尊重せられるのは當然である。

指揮労働
執行労働

ある。

また、労働には、指揮労働と執行労働との區別がある。指揮労働とは、生産の活動を指揮し監督する労働で、多少の筋肉労働も伴ふが、主に精神労働をするもので、精練労働に屬することは勿論である。工場技師・工場の監督などはこれに相當する。執行労働とは、指揮者の命を受けて、生産の活動を實行する労働で、多少の精神労働も伴ふことはあるが、主に筋肉労働をするもので、その中には、精練労働者もあれば、無精練労働者もある。

經濟的指揮者
技術的指揮者

労働の能率

指揮労働者は、更に經濟的指揮者と、技術的指揮者との二つに別ける。經濟的指揮者とは、資本金の増減・工場の開閉・人事の取扱など、事業全體に渉る方針を定め、總べての労働者を指揮するもので、これを會社でいへば、社長・取締役・支配人などの最高幹部がこれである。技術的指揮者とは、機械の設備・原料の鑑別・従業員の配置などの細かいことに付いて、經濟的指揮者の命令を受けて働くもので、工場長・技師などがそれである。經濟的指揮者と技術的指揮者とは、體を使ふことは少いが、心を勞することは多大なものである。殊に、經濟的指揮者は、事業の經營に付いて、全責任を持つので、その苦心は一通りではない。この様に、労働の種類は異つて居るけれども、皆一團となつて、各その労働の最大能力を發揮しなければならぬ。さうでないと、労働の能率は下り、事業は不振となり、各自は損失を受けることになる。このことは、後に説明する所得の分配にも、大きな關係があるから、特に注意を要するのである。また、全員が一團となつて、その能率を發揮する爲に必要なことは、人員の配置を巧にすることである。人には長短・優劣が

適材適所

あるから、よくこれを見抜いて、最も適當する所に配置すれば、能率は必ず擧るに相違ない。誰でも長所を發揮することになれば、その長所は段々と伸びるものであるが、適しないこと、好まないことを強ひても、上達はするものでない。

更に、労働能率の高低、それに随つて生産力の盛衰するのを、社會又は國家に付いて考へて見ると、その原因は次の四つである。その一は人民の身體の強弱、その二はその智能の深淺、その三はその徳性の發達の程度、その四は人口の増減である。

身體の強弱

身體の強弱は、労働者殊に筋肉労働者に取つては、非常に重大なことである。精練・無精練労働が分れるのも、身體の強弱に依ることが多い。家族の中で、身體の弱い者が絶えないで、労働が十分に出来ない様では、その生計は困難となり、社會でも、病院が何時も満員である様では、生産の發達は到底望めない。それ故に、生産能率を十分に發揮する爲には、大いに體力増進に努めなければならぬ。

智能の優劣

次に、智能殊に記憶力・理解力・應用力などは、労働者に最も必要なものである。これ等の智能の不十分なもの、長い年月を費しても、精練労働者となる見込みもなく、改良・發明の工夫も出ない。また、特に敏活の處置を要する工場作業で、氣轉の利く利かぬは、能率増進にも、安全保障にも、大きな違ひを生ずるのである。機械の損所を直に發見して、處置を誤らないことも、引火危急の際に、危機一髪の應變の處置を取ることも、共に氣轉の利く結果である。

徳性の高低

徳性に勤勉・忠實・協和の三つは、生産能率を高める爲に、特に必要である。言ひ換へると、陰日向ななほ、人口のことに付いては、後に精しく述べる爲、こゝには省くことにする。以上述べた體力・智能・徳性は、これを育成する方からいへば、體育・智育・徳育で、この三育の盛衰は、直に労働力に關係し、随つて生産力を左右することとなる。彼の英・米・獨・佛などの生産業が、支那・印度などに比べて、遙に盛大であるのは、資本の大小や、生産組織の完否や、制度の良否などにも依るけれども、労働者の體力・智能・徳性の相違に依るところも頗る多いのである。つまり、労働者の生産力が優秀であれば、貯蓄の餘裕が出来、恆産が出来れば、恆心も出来て、生産はますます増加することになるのである。

體育・智育・徳育と生産力

昔、英吉利人が印度で、初めて鐵道を敷設するとき、印度人を使つたところが、賃銀は非常に安いけれども、能率が擧らない。そこで、本國から、賃銀の十倍も高い労働者を連れて来たところが、能率が擧つた爲に、却つて、経費が安くて済んだといふことである。また、支那の労働者は賃銀が非常に安くて、日本の労働者の賃銀とは、比べものにならないが、日本の製品を支那へ持つて行けば、支那の製品よりも遙に安く、大いに歡迎される。それは、どういふ譯かといふと、支那人の體力は日本人に劣らない。併し、智能と徳性とは劣つて居る。殊に徳性は非常に劣等である。そこで、賃銀は安くても、能率が擧らず、製品の品等

は悪く、値段は高くつくので、日本の製品がどしどし支那へ輸出されて、支那の生産業は興らない結果になるのである。

教育の必要
それ故に、労働者の種類に關係なく、一齊に體力・智能・徳性を發達させる教育を普及させることは、生産業振興策の一つであつて、最も良い施設であるといはねばならぬ。

人口問題

人口の多少

労働者の多少

年齢別

男女別

假に、體力・智能・徳性を同等のものとするれば、家族が多くて、その中で労働する者が多ければ、生産も亦多いのは勿論であるが、社會でも亦同じ事で、人口の多い上に労働する者が多ければ、その富強は期して待つことが出来る。これに反して、人口が少いか、人口は多くても、労働する者が少ければ、生産の増加は望むことは出来ない。しかし、生産の増加は、労働する者の年齢別及び男女別にも、大きな關係があるものである。即ち、人口の多少・労働者の多少・年齢別の割合・男女別の割合の四つは、その國の生産業の盛衰を判断する有力な材料となるものである。それ故に、歐米諸國では、主にこの四つを精しく知る爲に、五年又は十年毎に、國勢調査を行つて居た。我が國でも、昭和五年に、第三回國勢調査を行つて、男女別・年齢・配偶の有無・職業・失業・従業の場所などに付いて、全國一齊に調査をした。

營利年齢

この調査で、人口の知れることは言ふまでもないが、労働者の多少は、年齢別でも、男女別でも知れる。即ち、労働に適する年齢いはゆる營利年齢のものが、幼児や老人の數に比べて割合に多く、また、男子の數が、女子の數に比べて、割合に多ければ、その國の労働者は多きことが知れ、隨つてその國は富強であることが判る。これに反する國は貧弱であることは、言ふまでもない。

男女別の割合は、現在、人爲では如何ともし難いことであり、また、各國とも甚だしい不釣合は無いけれども、年齢別の割合は、幼児死亡の多少に依つて、非常の相違がある。故に、衛生状態を改善して、幼児の死亡率を出来るだけ低くする必要がある。

現代の生産事業は、農業でも、商業でも、その組織が擴められて、大仕掛となつた。殊に、工業に於て、その規模の頗る大きなものが現れるに至つたので、多數の指揮労働者・執行労働者が、一つの集團を形づくつて、一緒に労働する必要があるに至つた。故に、現代に於ては、これ等の労働者が、身體・智能並に徳性を養成して、共に規約に従ひ歩調を一にして、その間に優劣の少きを必要とするに至つたのであつて、身體の弱き者・智能の淺き者又は徳性の足らない者は、自ら落伍の人となるを免れぬのである。

三 土地の生産作用とその特質

自然

土地

生産要素の一つである自然は、自然物と自然力とから成り立つて居る。自然物は、生産に用ゐられる實物で、自然力は、人の力に代り、又は人の力を助ける風力・水力・引力・蒸気力・電力などである。

自然物の中でも、土地は最も重要な生産要素である。その他の自然物には、土地の上に附着してゐる草木・岩石などがあり、土地の中に包含されてゐる石油・石炭・鐵物などもある。また、天與の自由財である水・空氣も土地に附屬する自然物で、その水中・空中にも、いろいろの自然物がある。併し、これ等の自然物は、自由財である水・空氣を除くの外は、何れも、多少の資本と勞力とを用ゐて、始めて生計に利用される

土地の特質

るものに過ぎない。これに反して、土地は生産力を持つて居る外にも、經濟活動の爲に場所を提供し、また、前述した様に、他の自然物をも包含して居るから、生産要素の一つである自然の代表として、土地だけを擧げるのである。

土地の效用

土地の效用は、前述した様に大きいが、併し、その生産力は何處でも同じではない。土地の效用を定めるものは、第一に氣候の順否と地味の肥瘠とである。農業は全く氣候と地味とに左右されるものである。第二は土地が包含して居る自然物の多少である。鑛業・水産業などは、この自然物の多少が最も關係がある。第三は土地の位置の適否である。商・工業が土地の位置と大きな關係のあることは、前にも述べた通りである。すべての生産業が、皆この三つの條件に關係のあるものではないが、概していへば、この三條件が土地の生産力を定めるものである。

土地の生産力

土地の生産力を十分に發揮させるには、勞力と資本とに依らなければならぬ。併し、勞力でも資本でも、用ゐる方の適否に依つて、土地の生産力の發揮に大きな違ひを生じて来る。例へば、上等の地味の土地でも、耕作を誤れば、結果は必ず不良である許りでなく、時としては、その生産力を減耗して、將來の爲にも不利益を來すことがある。その反對に、地味は多少不良でも、耕作が良ければ、相當の好結果を得る許りでなく、生産力をも増進して、將來の爲にも利益を招くことになる。また、目前の利益だけを考へて、土地の無理な使ひ方をすれば、その結果は、耕作を誤つたと同様なことになる。鑛山にしても、永い先のことを考へないで、勝手な掘方をすれば、他日、下層を掘る場合に、非常な不利益を蒙ることになる。この様な、勞力

土地私有權制度

や資本の用ゐる方の悪い結果は、たゞ、當業者だけの不利益に止らないで、永い間社會の不利益となるのである。それ故に、土地の生産力を尊重して、その力を永久に維持し、進んではその生産力を増進させて、社會全體の利益を確保しなければならぬ。その必要から生れたものが、土地私有權の制度である。

土地私有權の制度が確立されてから、昔の様に土地を濫用するものは少くなつた。ところが、社會主義者は、土地は神から人類一般に與へた財であるから、私有すべきものではないといつて、土地私有權制度に反對して居る。併し、冷靜に考へて見ると、昨年甲の耕作した土地は、今年乙が耕作し、明年はまた丙が耕作するといふ様では、誰でもその年限りの利益だけに着眼して、決して、長い將來のことを考へるものはない。さうなれば、地味は段々悪くなり、生産力は減り、結局、社會全體の不利益となるのである。實際、肥えた土地が、耕作の悪い爲に荒された例は非常に多く、殊に支那・印度には少くないのである。かういふ譯で、土地の持主を一定して、その生産力を永久に維持させる爲に出來たこの制度は、現在各國共に採用してゐるのである。

土地の私有は、農地から始つて、林野地・鑛業地といふ様に、段々擴まつて來たのであるが、この制度は、着々としてその效を奏し、彼のアーサーヤングのいつた様に、所有權の魅力は、荒廢の地を化して、黄金とした。例も少くない。つまり、人口の稀な時代には、土地も亦空氣や水のやうに自由財であつたが、今日では、土地は天與の財であるから、私有すべきものでないなどといふ議論は、全く空論に過ぎないのである。

收穫遞減法

この様に、勞力と資本とを適當に使つて、土地の生産力を、極度まで發揮しようとするのであるが、土地の生産力には、一定の限度があつて、その限度に達すれば、收穫遞減の法則に支配されるものである。この法則は、經濟に關する一般的作用を示したもので、土地の生産力が一定の限度に達すると、それ以上に生産力を増す目的で、勞力と資本とを増加しても、その割合に、生産力は増すものではないといふのである。例へば、一定の勞力と資本とを使つて、年産額百石の米を生産する土地があるとすると、この土地に、二倍または三倍の勞力と資本とを加へても、米の年産額は、それに比例して、二百石または三百石と増すものではない。大體百六・七十石または二百二・三十石に止るのである。即ち、勞力と資本とを増す割合には、收穫は増すものでなく、増す割合は減少する傾向があるものである。

この收穫遞減の法則は、土地の外にも應用される。即ち、或費用を掛けて、一階建の家屋を建てたものが、二倍の費用を掛ければ、大體、二倍の效用ある二階建の家屋を建てられるのであるが、三倍・四倍・五倍の費用を掛けても、それに比例して、三階建・四階建・五階建は出来るものではない。それ許りでなく、昇降の設備などに狭められて、效用も割合には増さないものである。

人口論

土地の面積は一定で、使用し得る土地も限りがある。ところが、人口は年々激増して、食料は益々不足になつて来るけれども、土地の生産力には、一定の限度があつて、それ以上は、收穫遞減法則の支配を免れないから、食料の値段は限りもなく騰貴して、人間は飢死する時が来るのでは無いか、といふ説を立てたのは、有名なマルサスの「人口論」である。即ち、前に述べた様に、假に十圓の費用を掛けて、一石の米を生

した土地に、三倍の費用を掛けても、收穫は二石餘りに過ぎないから、一石は二十圓位に騰貴することになる。ところが、人口は増す許りであるから、或はマルサスのいつた様な、危険なことになるかも知れない。けれども、更に進んで考へて見ると、收穫遞減を防止する手段もある。即ち、一方には、智能の向上に伴ふ農業技術の進歩があつて、耕作法を改善し、資本を十分に且巧に利用し、勞力と資本との組み合わせ方を巧妙にすれば、土地の生産力も相當に増加するであらうし、一方には、運輸交通の發達があつて、各地の物資の過不足を平均させ、食料の不足することの無い様に出来るのである。それ故に、マルサスの死後、百餘年を経た今日、彼の生國である英吉利でも、對岸の佛蘭西でも、彼がいつた様な、危険な事には一度も會つたことがない。天與の力に、進歩した技術と、豊富な資本とを加へたならば、マルサスの人口論は、一つの杞憂に過ぎないことが知れる。

四 資本の生産作用とその増加

資本

勞働・土地と共に、生産の要素である資本は、如何なるものであるかに付いては、學者の定義も一定して居ないけれども、大體、既往の生産物の中、將來の生産に用ゐられるものを、資本と觀れば差支ない。既に人間が生産したものであるから、經濟財であることは勿論であるが、この經濟財の中で、直接に欲望を満足することに用ゐられないで、將來何かの生産に用ゐられる物、又は用ゐられる爲に備へ付けられてあるものが、即ち、資本である。例へば、棉花・木材などの原料品や、機械・器具などの設備は、これに屬してゐ

る。これ等の物は、資本としての用途以外には、他に用途の無い物であるけれども、資本の中には、石炭や、車馬などのやうに、直接の消費用にも、また、次の生産用にも、共に使用されるものがある。この様な物は、實際に將來の生産の爲に使用される物だけが、資本であつて、その他の物は消費財である。

資本の種類

資本の種類は、(一)先に挙げた棉花・木材のやうな原料品や、機械油のやうな補助材料 (二)各種の機械・器具類 (三)農場・工場・商店のやうな生産用の建物 (四)築港・埠頭・鐵道・船舶などのやうな交通機關の設備 (五)堤防・溝渠などのやうな生産用の地上設備 (六)労働者の生活に必要な食料品その他の物資 (七)未だ消費者の手に渡らない種々の商品 (八)貨幣などに分れてゐて、何れも、效用の増加・價値の發生を圖る手段であり、材料である。この八種は、資本を形態から分類したものであるが、經濟から區別すると、固定資本と流動資本との二つになる。固定資本は、同様の形態を維持して、何回も繰り返して、生産の用に役立つもので、例へば、機械・器具、工場建物のやうなものである。流動資本は、たゞ一回だけ、生産に用ゐれば、その效用の全部を失ふもので、例へば、原料・補助材料・商品のやうなものである。さうして、固定資本の持つてゐる價値は、何回にも分つて徐々に消耗され、徐々に生産物の中に注ぎ込まれるものであるが、流動資本の價値は、たゞ一回だけでその全部が生産物の價値の中へ融け合ふものである。

固定資本と流動資本

固定資本と流動資本との割合

固定資本と流動資本とは、相俟つて、生産の用をなすもので、適當な割合を保つ必要がある。例へば、工場の設備は完全であるが、原料は不足してゐるとか、労働者を十分に雇ひ入れる資金が無いとかいふ様な、片寄つたことでは、十分な生産能率は擧げられない。即ち、固定資本に偏して、流動資本が缺乏すれば、折角の

資本の效用

完全な設備も、空しく遊ばせることになり、流動資本に偏して、固定資本が不足すれば、折角の原料も労働者も、十分に役立つことが出来なくなる。何れにしても、生産の不振を來すことになるのである。

資本の效用の著しいことは、生産の三要素の中、労働と土地だけで生産する場合を想像すれば、明白である。農業は、最も自然物及び自然力に頼り、また、殆ど努力だけの仕事であるけれども、相當の資本、即ち、農具や排水・用水などの設備を用ゐなければ、到底十分な收穫を擧げることが出来ない。況して、主に固定資本による今日の工業や、専ら流動資本による商業などは、資本が無くては、初めから成立しないのである。それ故に、人間が歴史を有する時代となつてからは、多少の資本を使用しないことはなく、近代になつて、經濟界が驚くべき發展をしたのは、増大した資本の賜物である。試みに、古代人の生活と、現代人の生活とを比較すると、欲望満足の點で、非常な相違がある。昔は『出づるに車あり』といつて、車馬を用ゐることとは、王侯の誇りとしたことであるが、現在では、誰でも自動車の利用さへ出来、更に飛行機の利用も出来る。衣・食・住すべて同じ譯で、今日の貧者でも、數百年前の王侯に比べて、劣らぬ文化的生活をして居る。

古代人の生活と現代人の生活

機械

動力機械

作業機械

この様に、資本の效用は偉大であるが、その資本の中でも、近世最も效用を發揮したものは機械である。機械は普通に、動力機械と作業機械とに分けられ、共に固定資本の一種である。動力機械とは、動力となる人馬の力を助け、またはこれに代る電氣力・蒸氣力・水力・風力などの自然力を發生させ、これを利用させるに、役立つもので、作業機械とは、人間の生産作業を助け、又は人力では不可能な精密・均整な動作をなす

機械の利點

機械である。紡績・織物・製粉・製材などの機械は作業機械である。動力機械も、作業機械も、共に器具の發達したものであるが、その精巧を極めた構造で發生する力は、動作の迅速・均一・細密・強大なこと、驚く許りのものもある。それ故に、今日では、機械を使用する範圍が、頗る廣くなつて、ます／＼生産業を有利に導いて居る。即ち、豊富な製品と、優良な品質とは、機械使用の結果として、生れたものである。例へば、養雞業者が、卵の孵化・雛の成育をなすに、電熱・紫外光線などを利用して、同時に數萬・數十萬羽の大量生産をなすなども、その一例である。併し、機械の使用にも、亦多少の弊は無ではない。即ち、その勞作が單調に陥り易いため、身體並に精神に疲勞を感じしめることが多く、また、その勞作が専門となるため、轉職に困難を感じしめるなどは、それである。併し、これも、その利益の大きいことに比べれば、頗る微々たるものである。機械は一時に、大量生産をするものであるから、販路の狭いものゝ生産に、不適當であることは、言ふまでもない。

機械の缺點

貯蓄

同じ生産要素の中でも、勞力の増加、即ち、勞働者の増加は、生産を増す代りに、消費者をも増すものであるが、資本の増加は、生産を増す許りであるから、經濟上最も有利なことである。資本即ち、機械・建物・商品・貨幣などは、過去の生産物の中、後日の生産の爲に保存せられたもので、その保存の行爲を貯蓄といふ。つまり、貯蓄は資本を生むの母であつて、機械でも、建物でも、商品・貨幣でも、貯蓄が姿を變へたものに過ぎない。

餘裕は貯蓄の第一條件

さて、貯蓄の爲には、餘裕のあることが、第一の條件で、多少に係らず餘裕が無ければ、貯蓄は出来るものではない。併し、たとひ餘裕があつても、第二の條件である將來に對する思慮を持つて居なくては、矢張り、貯蓄は出来ない。餘裕ある人は、萬人が萬人、必ず貯蓄すると限らないのは、この爲である。例へば、獨身の職工などは、その收入から見ても、浪費さへしなければ、多少の餘裕が出来、幾らか貯蓄すること出来る筈であるけれども、將來に對する思慮を持たないで、宵越しの金は使はないといふ江戸時代の悪習慣が抜け切れないから、貯蓄が出来ないのである。野蠻人に貯蓄のないのも、この爲である。

將來に對する思慮は貯蓄の第二條件

節制は貯蓄の第三條件

次に、貯蓄の爲に必要な第三の條件は、節制即ち、克己・制慾の徳性である。たとひ、餘裕があり、將來に對する思慮があつても、この徳性が無くては、貯蓄は出来ない。人間は誰でも、すべての欲望を、悉く満足させることの出来る程、澤山の餘裕を持つて居るものではない。従つて、將來の爲に幾分たりとも貯蓄をするには、眼前に横はる欲望の満足を適當に節制して、これに要する財を、後日の爲に貯蓄することが必要である。この節制の意志を貯蓄心といふ。

貯蓄心
歐米人と
日本人との貯蓄心

現代歐米の文明人は、何れも、その分に應じて、多少の貯蓄心を持つて居るが、日本人、殊に知識階級に屬する人や、都會に居住する者には、貯蓄心の少ないものが多い。大に反省を要することである。貯蓄の爲に、各人に必要とすることは、前述の三條件であるが、外部に於ても亦、貯蓄の爲に必要な事がある。それは、財産の安全を確保し、貯蓄の保全をする法律・制度の確立することである。若し、この法律・制度が確立しなければ、貯蓄は行はれないことになる。故に、一方には、社會の安寧・秩序を保つために、法律・制度を確立して、財産の安全を保障し、他方には、郵便貯金・銀行・信用組合・生命保険などを完備

財産の安全
貯蓄の保全

して、貯蓄の保全並に利用を圖つて居る。萬一、これ等の法律・制度の保護が不十分であり、貯蓄保全の機關が不完全であつたならば、貯蓄心は減退し或は全く缺乏するかも知れない。文化の程度の低い東洋の諸國人や、アフリカ人などに、貯蓄心の少いのは、この點が主な原因であらう。日本の封建時代に、徳政だとか御用金だとかいふ美名で、物資を勝手に徴發したやうなことが、昔の支那・朝鮮の役人が、勝手に人民の財を奪ひ掠めたやうなことがあつては、貯蓄心の起る道理はないのである。

そこで、一方には、道徳・宗教又は教育の力に依つて、貯蓄心を養成し、他方には、法律・制度を整へ、貯蓄機關を完備して、只管、貯蓄の増加を圖つて居るのである。ところが、社會主義者は、貯蓄したもの即ち資本は、共有すべきものであるといつて居るが、若し、貯蓄を貯蓄者の所有としなければ、誰が克己・制慾して、貯蓄する者があらうか。今日の露西亞が、廣大な自然と、多大な勞力とを、持ちながら、資本の不足に苦んで、十分の生産をなし得ず、物資の不足に、非常の困難を嘗めて居ると、同一の結果に陥るであらう。これに對して、社會主義者は、強制的に、共同貯蓄を行はせれば、可いといつて居るが、強制貯蓄の不成績であることは、町村・組合などの強制貯蓄の結果で、明かである。強制貯蓄は、人間の天與の性情と、全く相背く空論である。貯蓄は飽くまでも、自發的に行ふべきものである。貯蓄が強制的に行はれれば人間は貯蓄の興味を失つて、浪費に陥るであらう。その結果は、大きな不幸を招くだけである。

第四講 生産の組織と制度

一 分業と協力

生産の組織 生産の三要素、即ち、土地・勞力・資本が増せば、生産高も増し、これを減少すれば、生産高も減する。とは、大體に於て、認められることではあるが、三要素の組み合わせ方、即ち、生産の組織が、生産高の増減に、大きな關係のあることは、既に述べたところである。この生産の組織には二種類ある。一つは勞力だけの組み合わせ方で、これを分業と名づけ、一つは土地・勞力・資本の三要素を、適當に組み合わせることで、これを企業と名づける。

分業とは、平易にいへば、仕事の手別をすることである。即ち、一つの目的を達する爲に、多數の人々が、その仕事の一部分づつを分擔し、結局、全體の人の勞力が集つて、一つの目的を達することである。農・工・商など、各職を別けて従事するのも、一つの衣服を作るに、棉花耕作・紡績・染色・機織・裁縫など、種々の職業に別れて働くのも、同じ商業の内、米穀販賣・野菜販賣・燃料販賣・魚類販賣・呉服販賣などに、別れて居るのも、皆分業の一種である。即ち、職業の種類は千差萬別であるけれども、悉く社會の欲望を満す目的の爲に、各人がその一部分づつ仕事を、分擔して居るのであつて、所謂、職業的分業または、社會的分業といふのである。また、一つの職業に於て、多人數がその仕事の一部分づつを分擔する場

合、例へば、一つの紡績工場に於て、火夫・電工・繰綿工・紡工・機械工・荷遣職など、種々の職工が、綿糸製品を仕上げる目的の爲に、各仕事を分擔する場合のやうな分業は、これを技術的分業といふ。職業的分業でも、技術的分業でも、その目的は、各自の獨得の能力を、十分に發揮させ、専心その仕事に従事させて、生産の増加を圖ることにある。つまり、各自が一人で、全部の工程を負擔するよりも、手別をした方が、遙に労働の能率が擧り、従つて、全體の生産が多くなるからである。これに伴つて、各自の收得も増すことは、いふ迄もない。それ故に、分業は昔から行はれ、文明の進歩と共に益々進歩し、益々細かく分れて來たのである。

分業の利益

分業の利益の大體に付いては、前述した通りであるが、更に細かくその利益を擧げると、(一)各人が同じ仕事を繰り返すから、自らこれに熟練し、仕事は殆ど無意識の間に進んで、出来上りが速くもあり、良くもある。(二)その仕事が専門であるから、他の仕事に移る必要がなく、また準備も跡片付も早く済んで、時間に損が出来ない。(三)何時も同じ機械・器具を使ふから、修繕・改良・發明などが出来易い。今日使用されて居る機械の各部分には、専門職工の工夫で出来たものが、可なりある。(四)仕事に適した者を配置するから、作業の興味が湧いて來る。また誤つて不適任の者を配置した場合に、他の適任の者と代へることが、樂に出来る。

分業の弊害

併し、分業の爲に生ずる弊害として、やゝもすれば、左の諸項が擧げて論ぜられるのである。即ち、(一)作業が單調であるから、心身の倦怠を招き、健康を害するといふのである。(二)何かの爲に、その事業の製品に對して、需要がなくなるか。或は新機械の備付の爲に、現在の従業員が不用になるか。或は家庭その他の事情で、職業換をする必要が起つた時に、これ迄の仕事が専門であつたため、就職に不便が多く、その結果失業するといふのである。(三)老人でも、子供でも、婦女子でも、一部分の仕事は出来るから、就業するが、この老幼婦女が、同じ場所、同じ時間で、強壯な男子と共に働くから、心身を害し易い。殊に、感傷し易い性質の者は、その苦痛の爲に、現代の經濟社會を呪ふ様になるといふのである。併しこれ等の弊害は、分業の利益の大きいことに比べれば、まことに、小さいといつて可い。

分業の弊害は深く憂慮するに足らぬ

それ許りでなく、作業が單調で、毎日同一の仕事をするのは、如何にも倦怠を招き、健康を害する様であるけれども、この點に付いては、多年歐米各國の學者又は當業者が、調査を遂げて居るのであつて、その結果に依れば、若し同一の仕事を繰り返す上に於て、特に見出される興味を感得することになれば、倦怠は却つて少く、仕事が一定してゐるから、心身の健康は、寧ろ保持せられ易いといはれて居る。専門の仕事に従事した者が、自らの専門に移り易い素養を有する様になるは、明白の事實であつて、たとへ、その様な仕事に移り得るの機會がないとしても、専門の技術のない他の労働者に伍して、働き得られない道理はないのであつて、これも分業の弊害として深く注意を要するに足らぬのである。老幼婦女とか男子でも殊に強壯でない者などは、現在工業の大仕掛なものでは、その分業に依つて、特にこれ等の人々に従事させる仕事は自らある筈であつて、男女も強弱もすべて問ふことなく、同一に一つの仕事に従事させるのは、これから説くところの協力の趣旨に添はぬものといふべきである。

單式協力

協力とは、一個の生産に、多數の勞力を合せることで、例へば、一個の大きな鑛石を、數人が勞力を合せて、運ぶやうなことである。この様な協力は、極めて單純なもので、單式協力といはれる。即ち、單式協力は、一個人の力では出来ない事を、同時に多數の人の力を合せてすることである。これに對して、多數の者が、各異つた作業をしながら、協力することを複式協力といふ。

複式協力

以上の單式・複式の兩協力は、それ／＼に一つの分業となつて、二つ又はそれ以上の多數の分業と共に、同一目的の事業に従事することがある。近代工業の大仕掛なものには、これがその常であつて、これも複式協力に外ならぬのである。

生産過剩

協力も、分業も、共に能率の増進・生産の増加を圖るもので、社會はその進歩を望むのであるが、併し、協力も、分業も、如何に大仕掛にするとも、必ず利益がある譯ではない。若し、餘りに多量に生産して、社會の需要を超え、その販賣に苦しむことになれば、価格は下落して、協力の結果が利益でなくなつて来る。かういふ場合を、生産過剩といふのであつて、生産者は注意して、避けなくてはならぬ。商店でも、専門の店は、品物の仕入や鑑別にもよく目が利くから、萬屋よりは良い筈であるけれども、大都市でなければ、商品の需要者が少く、従つて利益を得られないことになる。即ち、小都邑の商店に、専門の店が少くて、各種の商品を商つて居るのは、この爲である。要するに、生産事業には、かういふ制限もあるから、よく適當の程度を考へて、善處しなくてはならぬ。

二 企業制の出現とその必要

企業

企業家

生産の三要素を適當に結合して、生産事業を営むことを、企業といふことは既に述べた。さうして、自ら損益の全責任を引受けて、企業を自論み、且自らその經營に當る者を、企業家といふのである。即ち、大は數百千萬の資本を有し、數百千の勞働者を使用して、大工場・大商店・大鐵道などの事業を經營する者から、小は小店舗・小作業場を、家族と共に經營する、獨立の小事業主に至るまで、何れも皆企業家である。さうして、地方の小自作農・小作農などは、勞働者であり、資本家であると同時に、企業家でもあるのである。

勞力費用の節約
良品の産出
企業家自ら
利し且社會
を益する
生産の調節

企業家は、事業から生ずる損益は、一切これを引受けるのであるから、常に、心を經濟界に注いで、生産し供給することに努め、その爲に勞力と費用とを用ゐるのであるが、これを用ゐるに當つては、出来るだけ節約するのである。即ち、出来るだけ生産費を少くして、出来るだけ多くの良品を供給し、出来るだけ多くの利益を擧げようと、計畫を怠らぬものである。それ故に、企業家の經濟行爲は、自らを利すると同時に、社會を益するものである。従つて、社會に於ける需要の消長に應じて、物品の生産高を調節することは、企業家自身の利益の爲にも、社會の利益の爲にも、甚だ必要のことである。言ひ換へれば、社會に於て需要の多い事業に、その資本・勞力・土地を用ゐることに深く注意するものは企業家である。それ故に、企業家の勤勞がなかつたならば、生産要素の組み合わせは當を失し、生産能率は低下して、需要の多い物資は不足し、

企業家となる人物

不用の物品は餘剰を生じて、各個人も社會も共に不利益を招くことになるのである。

資本の支配

指揮經營の才能

資本主義の生産

如何なる人物が、企業家となるかといふに、それには、先づ相當の資本を持つて居ることが必要である。その資本は、自分のものであると、借入れたものであるとは、問ふところでないが、兎に角、事業の損益を引受けるのであるから、資本の支配權を握つてゐる必要がある。事業經營の爲に、土地を購入し、又は賃借し、労働者を雇入れ、工場その他必要の設備を爲し、原料・補助材料を得るなど、皆資本を要することである。また、企業家自ら執行労働に當り、技術上の指揮監督に當ることもあるが、企業家の本務は、經濟上の指揮に在るのであるから、企業家となるには、指揮・經營の才能がなくてはならぬ。この才能のある者が、資本の力に依つて、生産に必要な各種の契約を結び、事業經營に必要な生産要素の支配權を握るのである。この様な譯で、現今、企業經營の實權、即ち、如何なる生産業を起し、如何なる方法・規模でこれを實行し、如何にこれを伸縮して行くかを、決定する權能は、資本の支配權を持つて居る者が、獨占することになり、この支配權を持たない者は、企業家となることは出來ず、たゞ企業家の命のまゝに、その仕事を分擔する外はない次第になつて居る。この様に、資本家が、生産支配の權能を握つて居る現今の生産組織を、資本主義の組織、又は資本主義の生産といふ。企業家には、大小種々の等差があり、權力も亦異つてゐるが、近年、交通の發達と共に、大資本・大規模の事業が大いに發達して、重要な生産は、大概、大企業家の經營になつて來たので、企業家の生産支配の權力が、特に目立つ様になり、その權力の増大に伴つて、他を壓迫したり、物價を恣に左右したりする様になつた。これ等の弊害はこれを除くことに努めて、社會の生産を統制

して行かねばならぬ。企業には、その經營者が、一個人であるところの個人企業と、多數人の共同である所の共同企業とがある。現今、企業の数から見れば、個人企業が多いが、生産の量から見れば、共同企業が勝れて居る。共同企業では、その加入者が、企業に必要な資本を出資し、加入者一同に代つて資本を保管する理事者を選び、この理事者が、加入者の申合せの範圍内で、自由に經濟行爲をすることになつて居る。今、生産に付いて、個人企業と、共同企業と、何れが有利であるかといふに、各特色はあるけれども、大體からいへば、個人企業の長所は、個人が自己だけの資本を以て生産を營み、事業成績の良否は、全部自己の利益となり或は損害となるのであるから、用意周到・精勵・忍耐で、生産費を節約し、生産の量と質とを高くすることに努める利益があり、また、行動が自由であるから、社會の需要に応じて、迅速に生産の調節が出来るし、事業を止めたり、一部を改めたりすることも、手早く行はれ、所謂、臨機應變の處置に適する利益がある。併し、一個人の力には限りがあり、また、一個人の利用し得る生産要素は、不足し易い短所がある。才能優れ大資本を有する有数の人物ならば、兎に角、普通の人間では、企業の利益を十分に擧げることが難しい。従つて、個人企業は、大資本を要する大きな經營には一般に不適當である。これに反して、共同企業は、多數人から資本を集めるのであるから、大資本を集めるに便利で、また、大資本を持つて居るから、必要の際には、容易に借款も出来るから、大資本の偉力を發揮して、大企業の利得を十分に擧げることの出来る利益がある。併し、共同企業は、企業加入者の申合せの範圍内で事業を經營するものであるか

個人企業の長所

共同企業の利益

個人企業の短所

共同企業の利益

個人企業の短所

共同企業の利益

個人企業の短所

共同企業の利益

個人企業の短所

共同企業の利益

ら、社會の需要の變化に従つて、臨機迅速にこれを變へる様な敏活なことは望めない。生産の方針を變へるには、加入者の相談を經る必要があるから、大切な機会を失ふこともある。また、寄合世帯であるから、事業に關する注意も、自ら散漫となり、いろいろの處置も、敏活を缺き易い。理事者の背任行為なども、かういふ所から生じて來るのである。そこで、概していへば、大工業や、金融業のやうな、大資本を要する事業は、共同企業に適し、精巧な作業を要する工業や、美術工藝品の製作などは、個人企業に適する。また、需要の變化の激しい裝飾品や、流行品などの製造・販賣も、個人企業が適して居る様である。

共同企業の仕組は、國々の法制の異ると、その國の特殊の事情によつて、いろいろの種類があるけれども、我が國の現在では、(一)商法で定められた合名會社・合資會社・株式合資會社・株式會社の四種の商事會社と、(二)民法・産業組合法に依る信用組合・販賣組合・購買組合・生産組合などの各種の組合と、(三)國家及び地方自治體の營む公企業との三つがある。

合名會社は、加入者の全部が、その事業の損益に對して、全責任を負ふものであるから、加入者も十分氣心を知つた少數の人に限られ、資本も概して少いのが常であるが、全加入者の心持が緊張してゐて、最も個人企業に近いものである。ついで、合資會社・株式合資會社となるに連れて、追々と、共同企業の特徴を帯び、合名會社とは、正反對の特色を持つて居る株式會社になると、損失の責任は有限で、株主の責任は、その所有株の額面だけに限られ、且一株の額面も少額であるから、誰でも自由に投資加入の出来る代りに、寄合世帯の風を、極端に發揮してゐる傾がある。また、その性質から、少額の資本を、多數に集めて、巨額

共同企業の種類

合名會社

組合企業

公企業

の資本を得るのに便利であつて、通例、大資本を持つてゐるものが多い。組合企業は、株式會社に似て居るけれども、株式會社が、商法で支配されて居るのに反して、組合企業は、民法の支配を受け、また、株式會社には、人員・資本などに關して、制限があるけれども、組合企業には、その制限がない。組合企業は、概ね、資力に乏しい人々の投資するもので、組合員互に相信じ、相助ける美風があるから、經營者に誠實な人を得れば、組合員の利益となることは少くない。公企業は、市の電氣事業のやうに、公民全部の責任で經營されるもので、その資本は、公團體自ら借入れるか、又は租税の中から支出するから、資本調達の困難はないけれども、出資者である公民が公企業に對する注意は散漫で、出資者の總代が集つて相談する議會でも、自己の資本のやうな深い注意は拂はれない。元來、組合企業や公企業は、經濟上の目的の外に、社會的・政治的・道德的目的を、多量に含んで居るので、必ずしも、經濟上の得失だけを考へる譯には行かないが、兎に角、公民並にその代表者が、この企業に對する注意・熱心は、淺いから、成績の擧らない場合が尠くない。

このやうに、企業には幾種類もあるが、生産上の企業組織としては、個人企業と商事會社とが、大きな役目を果して居るに過ぎないのである。

三 經營の大小とその發達の趨勢

企業の經營は、規模の大小によつて、大經營と小經營とに別れる。大經營とは、企業の仕組・分業・生産

大經營 小經營

の手續が、複雑なものをいひ、小經營とは、企業の仕組・分業・生産の手續が簡易なものをいふ。この經營の大小は、また大體に於て、資本と、労働者と、生産量との多少にも依るもので、大經營は一般に、小經營に比べて、資本も多く、労働者も多数で、分業が廣く行はれ、従つて、生産量も亦多いのが通例である。

今、大經營と小經營とを比較するに、小經營は、その規模が小さく、その仕組が簡易であるため、十分に全員を指揮・監督する便利があるけれども、その資本と生産量には制限があつて、多量の需要に應じ難く、また、機械の使用・分業の實行なども、十分に行はれないから、生産費が割合に高く、従つて値段を安くして、廣く販賣することは出来ない。故に、美術工藝品とか、精緻な細工を要する工業とか、原料の澤山に無い各地の特産品とか、家内工業の特産品とか、日用品の小賣とかいふ様な、販路の狭いものゝ生産に限られて居る。これに反して、大經營は、大資本を有して、機械を利用し、廣く分業を行つて、優秀な生産品を多量に且割安に産出し、廉價多賣を行ふことが出来る。従つて、販路の廣い場合には、農・工・商何れの方面でも、小經營を壓倒するけれども、販路の狭い場合には、生産過剰の損失を免れない。

交通の發達と販路

近年、水陸の交通機關が、異常の發達をしたので、交通は簡便になり、交通費は低落して、販路の開拓に頗る便利になつた。そこで、大經營は、その特色である大量生産の力を、遺憾なく發揮するやうになつた。これは、大經營が小經營を壓迫する動機となつて、大經營の榮える反對に、小經營は何か特殊の點がない限りは、日に月に、その運命を迫り詰められる観がある。手近の例を取れば、大都市には、貨錢の低廉な乗物が、縦横に通じてゐるので、これまで久しく、小經營の獨占と認められてゐた日用品・家具・衣服なども、

デパートメントストア郵便販賣業

都會の中心地に在る大經營の商店で、買ふやうになり、デパートメントストアとか、郵便販賣業とかいふ大經營の商店の爲に、微々たる小經營は、段々と販路を奪はれる様になつた。

この勢は、經濟界の一般の傾向で、社會の爲に有利である。たゞ、これが爲に、中小商工業者の苦境に陥ることは、大いに同情すべき點であるが、さりとて、社會の利益を犠牲にして、大經營の發達を抑へることは、經濟發達の爲に、決して取るべき途ではない。但し、小經營も、特殊嗜好品・手工製作品など、販路の廣くない物の製造・販賣の方面では、大經營に比べて長所があり、従つて、十分に存立の餘地があるから、小經營者は、將來この方面に向つて、進路を開くがよいと思ふのである。

四 強制々度の弊害と自由制度の發生

生産の制度

生産の消長を左右するものは、主に、生産の要素と生産の組織であるが、これと並ぶものに、生産の制度がある。生産の制度とは、吾々の經濟活動の範圍を限定する、種々の法律・制度をいふのである。元來、吾々の生産行爲は、どんな種類のものでも、社會の内で行はれるもので、直接又は間接に、他の人間の生活に影響しないものはない。それ故に、これを人々の勝手に任せて置いたのでは、種々の衝突や行違が起つて、十分に活動も出來ず、弊害をも生ずるのである。そこで、これ等の弊害を除き、その上に、吾々の活動を十分にさせ、活動の効果を確實にする爲には、或程度まで、吾々の經濟行爲を取締るところの法律や規則が必ず要になつて来る。これが即ち、生産制度の出來る原因で、企業の經營は勿論、その内部の各人の活動も、賣

買その他いろいろの關係も、すべて吾々の經濟活動は、この制度の定めた範圍内だけで認められ、保護せられるのである。それ故に、この制度の内容が、その國家・社會の經濟の特殊の事情に適するか、否かは、生産の盛衰興亡に、大きな關係を持つて居るものである。

現今の生産制度の所有

契約の自由

強制々度

今日行はれてゐる生産制度の特色を擧げると、第一は財産の私有權を確認してゐることである。若し、勞力・土地・資本の私有權、即ち、勝手に使用し、勝手に處分する權利が、認められないならば、物資を生産する時に、便利に且敏活に生産することは出来ない。また、個人でも、大小の企業でも、物資の所有に付いて、これを保護する掟がなくて、他人が勝手にこれを侵害する様なならば、誰も安心して、生産を營む者はあるまい。また、物資を使用するに當つても、注意して浪費を省き、成るだけ有効にこれを利用する精神は起るまいと思ふ。これが財産の私有權を認める必要のある所以である。第二は契約の自由を認めてゐることである。既に物資の所有權を認めてゐる以上は、物資の所有者が、物資の賣買・贈與・貸借などについて、自由に相手方と契約することを、認めるのでなくては、所有權を認めた甲斐もないことになる。これが、法律で契約の自由を認めた理由である。大體、この二つを原則とし、各個人の自由意志のまゝに、又は關係者の自由意志の合致に任せて、自由に經濟活動をさせるのである。さうして、その自由を確認し保護して、人々をして、各自の利益の爲に、全力を盡して經濟活動をさせようとするのが、現在の制度の根本原則である。この様なことは、今日の人から見れば、寧ろ當然なことで、怪しむ者もないが、併し、昔からさうではなかつたのである。例へば、職業を選ばにしても、今日では頗る自由で、農夫の子が軍人にならうと、商家の

自由制度の發達

子弟が醫者にならうと、華族の子供が商人にならうと、政治家の長男が職工にならうと、各その適すること、好むことを選むのであるが、昔、社會の發達が頗る幼稚で、所謂、自給經濟の時代では、家族の人々の一切の生産行爲は、悉く家長とか族長とかの命令で定つたもので、恰も奴隸のやうに、否應なしに勞働を強制されたものである。それが、封建時代、所謂、都市經濟時代となつて、一部には交易が盛に行はれるやうになつても、職業は世々代々、子々孫々、相襲ぐ掟であつた。殊に農民などは、その土地に定住固着すべきものと定められて、他所へ移住することは、嚴禁されてゐた。即ち、財産の私有は、比較的昔からあつたとはいへ、今日の様に完全なものではなく、契約の自由は勿論のこと、勞働の自由・職業選擇の自由・住所の自由さへ、共に少かつたのである。割合に早くから、自由の思想が普及した歐洲でさへ、十八世紀の中頃までは、かやうな状態が続いて居たのである。

併し、適材を適處に配置して、個人の特長を自由に發揮させることは、生産發達の爲に必要なことである。その爲には、個人の行動は、最もよく自分を知る本人自身に任せて、他人に強制される爲に起る責任感の減退を防ぎ、一方には、自發的の責任感を激勵して、勞働能率の低下するのを防いだ方がよいのである。また、かうしてこそ、社會の生産を發達させ、勞力は勿論、土地や資本をも、最も利益ある方面へ、自由に利用させることが出来るのである。この様に、損益全部の責任を各自に負擔させ、十分に活動させる爲には、完全な私有權と、契約その他の自由とが、要求されるのである。この自由制度の必要を、初めて力説したのは、十八世紀の中頃以來の經濟學者、殊にアダムスミス及びその一派の學者達である。

自由競争の生産

自由主義のこの制度は、十九世紀になつてから、各國の當局政治家が、段々と認めるやうになり、その中頃までには、文明國は大概これを實施するやうになつた。その結果、各個人は何れも獨立して、自由に自己に適する職業を選び、その營業の場所も、生産に最も好い條件を備へてゐる處を選んで定め、かうして、自由に營業することが出来る様になつた。そこで、各人は汲々として、各利益と考へるところに向ひ、利益のある仕事には、多數の人が集つて来て、互に及ばないのを恐れる様な有様になり、遂に今日の様な自由競争の生産界となつたのである。それ故に、今日の生産界では、各人が成るだけ多く生産して、成るだけ多くの利益を收めることに熱中してゐる。これは、たゞ自己の利益となる許りでなく、社會で最も需要の多い物を極力生産して、社會に供給することになるから、結局、社會の利益ともなるものである。即ち、生産業を以て國家に奉仕する所以である。さうして、自由競争の生産である以上は、優勝劣敗の道理を免れることは出来ない。即ち、企業組織の大小に關係なく、生産量少く、品質不良なものは、必ず損失を招いで、また起つことを得ず、自然淘汰、適者必ず榮ゆの原則を、眼のあたり見ることとなつた。さうして、適者生存のこの法則は、また、企業經營に於ても、各自を驅つて、優秀な企業組織を遂げさせ、熱心に技能を磨いて、その時、その所に於て、最も好い條件を備へる生産をさせることとなり、生産は當時の技能の許す限り、最大限度まで増進されることとなつた。最近五十年間に於ける、經濟界の大發展と、これに伴ふ豐潤な資本の蓄積・十分な欲望の満足とは、實にこの自由競争の制度に負ふところが多いのである。

自由競争の弊害

併し、自由競争にも、一方には又いろいろの弊害がある。即ち、激烈な生存競争の中にあつて、體力・智能・徳性の優秀な者は、すん／＼榮えて行くけれども、その劣等な者は、だん／＼追ひ拂はれ、強者は益々強く、弱者は愈々弱いといふ結果を招いで、物資の貧富の懸け隔りが頗る大きくなつた。さうして、その差は到底昔の時代の比では無いのである。また一方では、その懸け隔つた富の力を悪用して、貧者を壓迫するといふ道徳上の弊害も、往々起つて來た。従つて、貧富の間に反感・憎惡の念も、目を追つて深められて來たのである。

貧富の懸隔

生産の過剰と過少

恐慌状態

自由競争はまた、生産に於ても、幾多の餘弊を生じた。企業家をして、實際の需要を誤算させ、生産の過剰又は過少に陥らしめることは、その一つである。即ち、眼の前に利益ある生産には、我も我もと片寄つて、同業者の数が多過ぎるやうになり、その結果、社會の一部では、全く需要のない無用の物を生産して、生産過剰に陥り、他の一部では、需要ある物を十分に生産し得ないで、供給不足となるのである。さうして、その甚しい場合に至るときは、或は需要者の支拂ふ代價が騰貴したり、又は破産者と失業者とが、各所に續出して、恐慌の状態を呈したりして、經濟界は、全く攪亂される様になるのである。また、代價の安い生産品を作らうと競争する結果、生産費を減少させる爲に、或はその品物を粗悪にしたり、又は賃銀を引き下げ、殊に賃銀の安い婦人や幼老者を使役するやうになつたりして、生産界に於けるその生産者の信用を失はしめる様になるのである。

五 經濟政策の實施と社會主義の空論

社會主義

そこで、自由競争の弊害の方だけに、多く着眼するものは、やゝもすると、一方に利益あることを忘れてこの制度の改革を企て、これを根柢から撤廢しようとする様になつた。彼の社會主義者の運動はその一例である。そのいふところを聞くに、自由競争の弊害は、つまり、財産の私有殊に生産要素の私有が、原因であるから、現今、私人の私有する土地、その他の生産手段は、全部、社會の共有とし、社會に於ける欲望を、統計的に算出して、これに適應した生産要素の組み合わせを爲し、社會の各員が連帯で、生産に當ることにするのが、良いと主張するのである。言ひ換へれば、統制經濟の組織を採つて、社會の全部を統制經濟化せよとするものである。その方法に付いて説くところは、種々あるけれども、つまるところは、自由競争制度をやめて、全社會の資本を統一し、生産を統制しようとするものである。

統制經濟

社會主義の
説に對する
批評

併し、このことに關する社會主義の主張には、大きな疑問がある。先づ、統制經濟となれば、各個人は社會の統制のもとに、その經濟上の自由を失はねばならぬのであるが、各個人はその完全な自由を奪はれても、なほ且、今日のやうに、熱心に各その生産作業に従事するであらうか。現今、個人は損益の全責任を負担すればこそ、その仕事に營々として、日もこれ足らざる有様であるが、今若しこの責任を免れ、昔の強制労働と同様な強制労働の制度に戻されても、なほ社會に對する單なる義務心だけで、今日の様な生産能率の維持が出来るであらうか。若し労働の能率が劣り、原料は不注意に使消されて、無駄が多くなり、機械や土地は、

改良主義の
經濟政策

後先の考もなく濫用されて、生産力が減るとすれば、生産は次第に減らない譯には行かぬ。さうなれば、結局、社會の物資は不足して、人間全體の生活程度は低下する外はない、この場合に、人々が欲望を十分に満足させることの出来ないのは、言ふまでも無いことである。つまり、社會主義者の嫌ふ貧富の懸隔は無くならぬであらうけれども、これと同時に、社會の各個人は、悉く困難することにならない譯には行かぬ。一體社會の經濟發達の爲に最も重要なことは、何時の世でも、生産力の増加と、これに伴ふ欲望の満足の増進とである。今若し、これに反して、物資は缺乏し、社會の各個人は困難する様になつたとすれば、これは、自由競争の弊害を除くと共に、その利益をも葬つて、所謂、元も子も無くするものである。少くとも、現今の人間の望むところではない。社會主義者の説は、優者を嫉む卑劣の感情を満足させるための僻れた説でなければ、全く原因と結果との關係を辨へない空論に過ぎないと思はれる。

社會政策

併し、自由競争の弊害は、社會主義者でなくとも、誰でも、これを認めて居るのである。また、これを棄て置くべきものではない。さればとて、これに代る良い制度も、現在の人間には見當らないので、今の責任ある當局者は、皆その手當として、對症的療法、即ち弊害の發生した場合に、出来るだけこれを緩和し、又は芟除する方策を講じて居る。即ち、制度の固有の弊害を、根本的に治療することは及びも無いが、對症的療法だけは出来るものとして、これに盡力して居るのである。これが所謂、經濟政策の大部分または社會政策といはれるものである。例へば、貧富の懸隔から起る反感・憎惡の念を緩和して、平和な文明の恵に浴せしめる爲には、労働者保護法などが施行されて、婦人労働者の夜間就業の禁止とか、少年労働者の就業時

間の制限とかに付、嚴重な規定を設けて、雇傭關係に關する自由契約の悪用を防いだり、勞働保險制度に依つて、勞働者の爲に醫療や生活の安全を保障したり、普通教育の制度に依つて、貧民の教育の便宜を圖つたり、また公私の社會事業施設を各地至る所に分布して、細民の福利の増進と、保護・救済とに、何の手落ちもないことを期して居るなどは、皆それである。

また、自由競争の結果として、時としては生産過剰、時としては生産過少の弊を生ずることも前述した通りで、これは元來、經濟に付いての無政府状態が原因となつて居るのであるから、この無政府状態の弊を防ぐ爲には、當局者は勉めて直接・間接に生産と消費との調和を圖つて、或はその生産を制限したり、或はこれを奨励したりする外に、或種の生活必需品に付いては、米價の統制・繭價の統制などの様に、政府自ら監督して、その自由競争に制限を加へようとして居る。即ち、自由競争の弊を認めて、成るだけこれを矯正しようとして居るのである。いはゞ、完全な自由競争ではなくて、幾分の制限を加へた自由競争である。つまり、今日の生産の制度は、生産組織の改善と物資供給の豊富とを眼目として、成り立つて居るのである。

第五講 生産の消長と個人の幸福

一 生産の増加と分配の適否

生計と平素の心掛

各自が生計を立て、經濟上の目的を遂げる爲には、成るだけ多くの物資を得て、成るだけ完全にその欲望を満足させなくてはならぬ。經濟の主眼とするところは、つまり、欲望の満足に外ならぬのである。欲望が十分に満たされれば、満たされる程、その生計は樂である。その反對に、生計の苦しいといふことは、欲望が十分に満たされないことを意味する。けれども、生計が樂であるとか、苦しいとかいふことは、物資の多い少い爲ばかりではない。一つには又各自の心掛如何にも依るものである。欲望の並外れて強い者は、たとひ、物資が多くても、常に心に不足を感じ、従つて、生計は困難である。それに引き換へ、欲望が比較的單純な人は、よい加減の程度の満足で不足を感じないから、物資は少しでも濟され、生計は樂だと感ずるものである。併し、誰でもその欲望といふものが、既に一定したものである以上、さうしてその心掛に變化がなかつたなら、財の豊かなほど、その人は經濟的に満足される筈である。この道理は、個人の場合でも、社會の場合でも、差別はないのである。

生計の難易と分配の適否

今日、誰でも外に特別の事情のない限りは、財貨の少いよりは、多い方を望んでゐる。さうして、欲望も成るだけ多く満足させようとして望んでゐる。國家から觀ても亦同じことで、物資の供給が豊になればなる程、

國民の生計は樂になる。それならば、幸福の基である物資は、どうして得られるかといふに、それを得る途は生産に依るより外にはない。即ち、生産を増進することは、生計を樂にする基である。さうであるから、生産が増加されれば、經濟發達の基礎は成り立つたのである。けれども、相當に多人数が集つて出來た大小の社會では、たゞ財の供給が多いといふだけでは、必ずしも、その社會の生計全部が樂になるとはいへない。生産された財の分配が適當でなければ、その生計全體は決して樂にはならない。従つて又、必ずしも各個人の幸福ともならないのである。このことは、一家族のやうな小社會でも、また國といふやうな大多數人の共同社會でも、あまねく認められる事實である。

例へば、五人六人といふやうな小人数の一家族で、月収百圓のものが、百二十圓となり、百五十圓となつたとすれば、その家族の暮し向きは、収入の増したゞけ樂になつて、欲望も前よりは多く満される筈であるが、収入だけ増しても、その使ひ別けが上手でなければ、暮しは必ずしも樂とはならない。収入の増したのをよいことにして、主人の心に觸りが出て、道樂を始める、贅澤になる、自分一人でも多く使ふとなると、細君や子供の消費の爲に、主婦の手に渡されるものは、前よりも却つて少くなつて、家族の生計は苦しくなることが無いとは限らない。つまり、病氣に罹つても、十分の手當が出來ない。學用品も揃はないといふ様なことになるのである。これでは、主人の満足とは反對に、家族の幸福は減らされて、収入の増した爲に、幸福を増すどころか、却つて、不幸となつたものである。

一國・一社會について見ても、これと同様で、たとひ生産だけは前より増しても、その生産の結果が社會

の一小部分の人々だけのものになつて、多數の者に行き渡る分が増さなければ、少しも社會の幸福とはならない。例へば、昔の專制政治時代には、横暴な大將とか、姦佞な君側の臣とかいふ少數の者だけが、豪華を極めた生活をし、自分の野心の爲に無用な兵を起したり、無慈悲な租税の取り方をしたりしたことがある。これでは、民百姓は、折角汗水流して働いて、財を殖しても何の甲斐もない。却つて悲惨な生活に苦しむ許りである。これに反して、明君・賢相が世に出て、自ら手本を示して簡素な生活を營み、民と共に樂しむといふ風であつたならば、生産の増加するに連れて、社會はそれだけ樂になつて來る。即ち、それと、これとの差は、財の分配が當を得たか、否かに依つて起るものである。これ等の例を見ても判る様に、經濟の發達といふことは、たゞ生産が増すことだけではない。その増した財が、適當に社會に分配されることを伴はなくてはならぬ。適當な分配を伴はない生産の増加は、必ずしも、經濟の進歩ではないのである。

二 分配の改革意見とその長短

それならば、如何にすれば、財の適當な分配といふ目的を達することが出来るかといふに、分配の仕方と生産の増減とは、原因・結果の重大な關係があるから、萬一にも、分配の方法を誤ることがあると、不平不満を起す結果、生産要素の運用、即ち、資本の貯蓄・土地の開發・労働の能率に、非常な悪影響を及ぼして、著しく生産の減少を惹き起すことが少くない。従つて、經濟の發達も望まれないことになるから、財の分配は、たゞ、此處にあるものを分けるといふ様な、單純な問題でなく、頗る困難の經濟問題となるので

生産の分配
問題

ある。

それ故に、財の適當な分配といふ問題に付いては、昔から、多くの聖賢や學者が、相當に頭を悩ましたもので、今日でもまだ、萬人が萬人、申分のない方法であるといふ程の、完全な分配方法は見當らず、現在の分配方法に不満を抱くものは、決して少くはない。それ等の人々からは、いろ／＼の異つた意見を聞くのである。今試にこれを列挙して見ると、第一は、平等分配説で、俗人の中にはこれを主張する者も少くはない。第二は、欲望に比例して分配しようといふ説。第三は、才能に比例して分配するのが適當であるといふ説。第四は、労働即ち勤務の量に比例して分配するが良いといふ説である。大體この四つで、何れも現在の様に貧富の懸隔から生ずる生産の分配を不適當と認めて、これを革正しようとする社會主義者の間に唱へられる意見である。

平等分配説

先づ、第一の平等分配説に依れば、大人も子供も、男にも女にも、即ち、社會の各人に、平等に各一定量の生産物を分配しようといふのである。一應尤も至極の様に思はれる説であるが、これを實際に當て嵌めて考へて観ると、随分滑稽なことになる。今手近い例を、吾々の日々の食物にとつて見る。我が國の、米の年産額は約六千萬石であるから、これを平等に分けるとすると、一人に對して年一石、即ち、一人一日につき約三合に當る。そこで、昨今、世の中に生れ出た赤ん坊にも、大兵肥滿の角力取にも、一日三合といふあてがひ扶持では、角力取や筋肉労働者は、空腹に堪へないで、到底働く勇氣も出ず、掛聲を出す元氣もあるまい。ところが、一方では、子供・老人・病人などの分は、剩つて腐らせることになる。つまり、この分配

欲望に比例する分配説

方法では、欲しい者の手には、十分に渡らないで、欲しくない者には、持て餘すほど渡されることになる。また、衣服も住居も平等であつたなら、なほ同じ様な滑稽な悲劇も演じられるであらう。寧ろ、子供には少く、大人には多くといふ様に、その人の消費能力に應じて分配する方が、遙に適當である。さうしないと、各方面に、過少に苦しむものと、過多に悩むものとが續出して、社會の欲望を完全に満足させることは出来ない。それ故に、分配の分量は平等で、一見公平の様に見えるけれども、欲望を完全に満足させることの出来ない點から見れば、結局、不公平極まるものといはなくてはならぬ。言ひ換へれば、社會に於ける物資の需要と供給との調和を亂して、社會の富を浪費し、物資の效用を減損する結果に終るものである。つまり、この説は實行の見込のない空論である。

第二の欲望に比例して分配するが良いといふ説は、各自の欲望の多少・大小に應じて、按分しようとするのであるから、身體の強弱や、心持の相違をも斟酌して、日用品を始め、薬用品や嗜好品なども、適度に按分するのである。現在平和の家庭では、物資を平等に分配しないで、各自の欲望を斟酌して、これを分配しその欲望を満足させて居る。即ち、着物でも履物でも、持物でも、或は嗜好品でも、皆各自の欲望に應じて與へられて居る。この平和な家庭の分配法を、社會にも適用しようとするのが、この説の考である。食べ物にしても、各自の欲望の大小に應じて分配されるから、前の平等分配のやうに、一方では過食して不快を感じ、果ては病氣に罹るのに、他方では空腹で歩くことも出来ないといふ様な、不合理なことは起らない。平等分配説が、一片の空論に過ぎないのに比べると、この方法が遙に良いかも知れない。即ち、一定の經濟財

を用ゐて、最も完全に欲望を満足する仕組である。

けれども、この欲望に比例する分配法にも、種々の弱點がある。その一つは、たとへば欲望さへあれば、働いても働かなくても、相當に分配を受けられることである。今、大食漢で、しかも煙管と盃とは手から離さない人間があるとすると、この者は働くことはなからうけれども、欲望だけは他人の二倍も三倍もある。この者に他人の二倍三倍の分配をすることは、不合理であらう。また、虚栄心の強い婦人が、身に美装をこらし、家を外にして、歡樂の巷を飛び廻つて居るとする。この婦人の欲しいと思ふ贅澤な着物や、身の廻りの品は澤山にある。ところが、一方には、財の生産の爲に額に汗して働き、常に粗末な労働服を着、簡素な食事をとつて、感謝の生活をして居る勤勉な若者があつたとする。この場合に、欲望の多少を標準として、虚栄の婦人には多量の財を與へ、勤勉な若者には少量の財を分つとしたならば、誰か啞然としないものがあらうか。この様にして、今日の勤勉な人達が、果してその勤勉を續けるであらうか。總ての人間が聖人ならば、兎に角、人間に利己心のある限り、殆ど不可能のことであらう。他の一つは、分配の標準とする欲望の多少を知ることの困難である。假に各人にその欲望を申告させて、その多少・大小を定めることすれば如何。狡猾無頼の輩は、欲望を誇張して、多大の割當を受け、一方、勤勉正直な人は、眞面目に申告して、報酬は最も少く受ける様なることになるであらう。それでは、その生産する量と、受ける分配の量とは、全く反比例をすることになる。さうなると、この分配法は、眞面目に働く者の數を減じて、生産の要素である労働を破滅させるやうになるであらう。かやうに考へると、この分配法は、經濟上からも、道徳上からも、實行すべきものでないと言はねばならぬ。

才能に比例する分配説

第三は才能に比例して分配するのが適當であるといふ説で、近世の社會主義者の中でも、少し進歩した考のあるものが、平等分配説・欲望比例分配説を否定して、唱へ出した説である。併し、才能の優劣は、これを比較計量する標準がない。本人の申告に依つて分配する不都合は、前に述べたところと同じである。そこで、才能の比較は、同一時間に於ける生産の多少に頼るより外に據るところがない。若し、さうだとすれば元來人間の才能には、優劣長短の開きが甚しいものであるから、分配にもまた大きな開きが出来るとする。また、生産の多少に依つて、分配を行ふことになれば、直接に労働した人間ばかりでなく、間接に生産に與つた機械の所有者・土地の所有者も亦、その生産に對する效果に應じて、分配を受けることは當然のことである。さうなれば、今日の分配法と少しも違つたところはなく、分配の不均衡の甚しいものとして、再び非難を繰り返されることになる。

労働に比例する分配説

そこで、一部の者は、以上の三説を悉く否定して、第四の説即ち、労働に比例する分配説を持ち出した。これは、各人の労働の分量に依つて分配しようとするもので、専ら労働時間の長短を標準としようとするものである。この説の長所は、働き得る體をもつた者は悉く働け。働かない者は食ふな、着るなといふ點にある。すべての人間を勵まして、額に汗して食はせる美風は、誰も異議のある筈はない。併し、同じ労働時間で、労働の分量は必ずしも同じでなく、精神上にも、肉體上にも、可なりの相違があることを忘れてはならぬ。

若し、天候や土地の關係や、労働の種類などを考へず、たゞ時間の長短だけで労働の分量を計算し、その分量に應ずる様に、財貨の分配をすれば、非常に不公平の出来ることは、少し實際を考へる人には、直に判ることである。手近い例は、地下幾百尺の炭坑内で、日の目も見ずに、カンテラの光を頼りに働いて居る坑夫と、空気が日光に恵れた野原で、花壇の手入をして居る園丁とが、その働く時間は、共に八時間であるとしても、精神と肉體とに受ける苦痛は、果して同じであらうか。また、構圖を考案する爲に、雲を眺めたり、空を仰いだり、山河を觀たりする繪師と、有毒瓦斯の發生する溝渠の中で、下水工事をしてゐる人夫とは、同じ一日でも、時間のたつ早い遅いの感じは、一樣であるかどうか。

若し、労働の難易に應じて、樂なものとは短時間に見積り、苦しいものは長時間に見積つて、按分比例で、時間を換算することになれば、前に擧げた才能に比例する分配の場合と、略同じ様なものとなるであらう。また、労働の能率や苦樂に關係なく、同じ時間の報酬は同じだといふことであれば、精神の緊張を全く失つて、周到な注意を喚び起す力もなくなり、倦怠に反抗する努力もなくなつて、作業は遅々として捗らず、原料の使ひ方は放漫となつて、結局、分配の元である生産を減すことになる危険がある。

以上述べた様に、分配方法を改革しようとする四つの意見は、分配を行つて居る内に、何時ともなく、生産力を減殺する結果を免れないので、たゞ理想論に過ぎないもので、その實行は、今日の社會では、出来るものとは思はれない。

四説とも實行は不可能

三 物價の高低と所得の増減

現行の分配法

今日實際に行はれて居る分配の制度は、私有財産を持つことの出来るのを土臺にして、自分の思ふままに土地・資本・勞力を利用し、生産の結果は、その局に當つた者が、全部これを收める仕組である。また、自ら土地・資本を利用する資力の無い者は、企業家と契約して、生産要素の一つである労働を分擔し、豫め契約した分擔の報酬、即ち、賃銀を得ることになる。或は、土地があつて、資本や勞力の無い者は、土地を他人に貸し與へて、その報酬である地代を收めることになり、また、資本があつても、自ら利用しないものは他人に貸して利用させ、その報酬として利子を得ることになる。つまり、他人殊に企業を経営する人と、隨意に協力の條件を定め、その協力の分量に應じて、生産の結果の分前を取る仕組であつて、全部の生産を擔當した者が、生産の結果の全部を取るのに反して、生産の一部を分擔した者は、生産の結果の一部分だけを得心することになる。この仕組はつまり生産に参加した割合に應じて、生産物を分配することとし、生産の爲に各人の協力を激勵して、他の分配方法の様に、少しも生産を害することがなく、却つて、大いに生産を促す効果があるのである。即ち、今日の人智では、最も公平な分配法と認められ、これに勝るものは見當らないのである。

分配と物價の高低

現今實行して居る分配方法では、生産者はその生産した物を、直に自己のものとするのである。併しこの方法は、自給經濟の時代ならば、何の不便もないが、今日のやうに進歩した經濟社會では、吾々は總ての入

用の物資を、自己一人の手で生産するものはない。皆それ／＼一定の専門の生産業に従事して、お互に自己の生産物を、他の生産物と交易するのである。そこで、その交易を滑にするために、物資の賣買を専門とする商人が出來たのである。即ち、現今の生産者は何れも、初めからその各種生産物の全部を自己のものとする目的で、生産するのではなく、その全部又は一部を賣り渡して、成るだけ多くの貨幣に換へるのが目的である。これと同時に、自己の所望する物は、他の生産者又は商人から、これを買ひ入れることになり、また、生産の一部を分擔した参加者中、資本主に對しては利子、労働者に對しては賃銀を、自己の生産物を賣つて得た貨幣で、分配することになつて居る。そこで、代價の高低が、分配に非常に重大な關係を持つものとなつた。即ち、生産物の値段が全體に増加し、従つて、各自の貨幣の所得も亦増したとしても、その所得で買ひ入れる物の代價が、生産物の値段の増加した割合以上の割合で高くなれば、買ひ入れる物の分量は少くなるから、欲望の満足は減少することになる。それ故に、實際に受ける分配の多少を明かにする爲には、物價の高低を明かにしなければならぬのである。

この様に、一切の經濟行爲が、交易を基礎として行はれる以上、各人は生産物の分量よりも、その賣上金高の多いことを目當とするのではなく、多くの分配を得ることは出來ない。値段の高いといふことは、社會の欲望が多いといふ證據であるから、成るだけ値段の高い物が、生産せられることは、社會としても利益である。これに反して、需要の少い物、即ち、値段を安くしなくては賣れぬものは、幾ら多く生産しても、社會の爲には左程利益にはならない。即ち、物價の高いといふことは、社會がこれに對して欲望の多いこ

貨物と生産制限

とを表明し、これに依つて生産を獎勵する所以であつて、物價の高低を考へて、生産を増減するのは、經濟の本則上、正に當然の處置である。それ故に、企業家は、その生産品の需要が少く、値段が安いと見る場合には、その値段を引き上げようとして、成るだけ生産を控へることがある。例へば、百の生産力あるものでも、凡そ七・八十といふ邊でやめて置く。つまり、生産高を二・三割減しても、代價が二・三割高ければ、總賣上金高では多い計算となる。彼の紡績・肥料などの諸工業の當業者が、時々生産の手控をするのはこれが爲である。

併し、社會から見ると、出來る物をわざと作らないことは、生産力の發揮を怠ること、社會經濟の損失である。また、國民經濟の進歩から見ても、欲望を満足させる爲には、苟も經濟財と名のつく限りの物は、何物でも出來るだけ多く産出しなければならぬ筈である。即ち、生産の増進することは、國民經濟の進歩を促す第一要件であるが、代價に依つて分配の行はれる現在では、企業家各自の分配高を多くする爲には、この原則とは反對の生産制限も敢てすることに成る。無論、分配も交易も、欲望を満足させる爲の手段であつて、その手段の爲に、經濟の基本である生産を制限することは、誠に面白くないことであるが、現在では已むを得ないのである。併し、社會の利益に反する様に見えるこの生産制限も、社會の需要が少くて、値段の安い品物の生産を制限することであるから、寧ろ當然のことであり、また、この制限によつて不用となる部分の生産要素、即ち、失業となる労働者や、無用となる資本を、需要の多い物品の生産に振り向けることが出來れば、その制限は寧ろ社會の利益であるが、多くの場合には、その振り向けが行はれないので、社會は

損をすることになるのである。それ故に、この損を成るだけ少くする様に努めるのが、經濟政策當局者の任務である。

物價の適正
と所得の増

個人の幸福

つまり、物資の供給が多ければ、値段の安くなるのは當然で、代價の下落が一種類の物資だけでなく、廣く各種の物資に及び、延いては、賃銀・地代・食料品などでも、一律に安くなるならば、その下落は決して生産者のみ單獨にその困難に陥るものではない。即ち、たゞ一部分の生産だけが增加して、他の物の生産が、これに追ひ付かない時に、前述の様な變態と不利益とを生ずるのであるから、各種の生産は成るだけ一齊に歩調を揃へて、増進しなければならぬ。かうして、各種の物品の價格の變動が、適正な割合を保ち、それに連れて、各自の所得の多少が生産の増減と釣合を保つ様になることは、經濟進歩の要件である。言ひ換へれば、物價の變動と所得の分配とが、常に正しい關係を保つことは、社會の生産を進め、欲望の満足を完成させるに必要な要件である。つまり、個人の幸福に重大な關係あるものは、物價と所得との釣合である。以上の趣意を約言すると、物價は一般に變動の無いのが望ましい。若し高低があるならば、各物品の市價がみな平行して進退することが望ましい。さうすると、各人の所得も、これに連れて一般に増減するであらうし、個人の幸福は、各その勤勞に應じてますます増進されるであらう。斯様な成行が國民經濟の進歩といふべきである。

國民經濟の進歩 (經濟原論) 終

昭和七年七月十五日印刷
昭和七年七月十五日發行



國民經濟の進歩

非賣品

著者

氣賀勘重

編輯者兼

文部省構内
財團國民工業學院

代表者 井上角五郎

東京市深川區東大工町六十七番地

東京印刷株式會社

代表者 松井方利

著作權所有

印刷者

昭和十一年八月十日

東京印刷工業會



東京印刷工業會

東京印刷工業會
東京市神田區東大工町六十五番地
代表者 北川 武夫
理事 國 野 工業 學 會
文 書 部 長 官
重





